

英文学に超在したケルト伝承文学の異界と神秘性

—ケルトの森の記憶と記憶の森（伝承の森羅）—

田 文 揚

THE SUPERNATURAL WORLD AND MYSTIQUE OF CELTIC LEGENDS

SUBSISTED IN THE FRINGE OF ENGLISH LITERATURE

- THE RECOLLECTIONS OF OLD CELTIC FORESTS AND LUXURIANCE OF LEGENDS -

RESEARCHER: FUMIAKI DEN

The Faculty of Economics.

Keiai University

目 次

(CONTENTS)

はじめに

FOCAL THEME

SUPERNATURAL AND TRANSMIGRATION <超自然と輪廻転生> … 6

1 「ケルトの素描とその概史」	—歴史に於けるケルトの系譜— …… 7
(1) ケルト民族の年歴と回歴	[+資料1. ケルト語群系譜図]
(2) ケルト諸言語の衰微	[+資料2. ケルト言語語地図]
(3) 英国と英国伝承文学の系譜	
2 「ケルト伝承文学の照察」	—文学に於けるケルトの伝承— …… 12
(1) 英国伝承文学の諸相と氣息	
(2) 神話と民話と伝説と—	
(3) 伝承文学の役儀とケルトの異色性	
3 「ケルトの閃影と真影」	—理想と深層に於けるケルトの幻想— …… 22
(1) ケルトの肖像と理想	[+資料3. ケルト古歌『オシアン』]
(2) ケルトの幻想とカルトの神秘	
(3) ドゥルイドと異界のヴィジョン	
(4) 日本とケルトと輪廻転生	
(5) 深層心理に伏流する精神の会流	
4 「演義小説による追懷」	—異界の物語に於けるケルトの追想— …… 30
(1) 今作『皆既月食』—ケルトの幻影—	[資料4. 演義小説『皆既月食』]
(2) 作品の回顧と反芻	
おわりに	…… 42
注	…… 43
参考文献	…… 44

はじめに

“History to the defeated may say alas but cannot help nor pardon”

— WystanHuge Auden —

「歴史は敗者に対して、お気の毒にとは言っても援助も許しも与えはしない」

— オーデン, 筆者訳 —

ケルトは広くヨーロッパに所在を維持し、先進的な冶金術にて二つの文化の英主となった。しかし歴史は彼らを敗者としてユーラシアの僻隅に、ヨーロッパの極西に追いやり、近年までヨーロッパのフリンジ (fringe/周縁) に生きる少数民族の中の一塊として遇してきた。

現在強い影響力を持つ汎ケルト的な組織のケルト連盟 (Celtic League) はケルトの国としてアイルランド (Ireland), スコットランド (Scotland), ウェールズ (Wales), コーンウォール (Cornwall), マン島 (Isle of Man), ブルターニュ (Brittany) の6か国を認めている。⁽¹⁾

これらの地域では比較的最近の歴史現象としてケルト人としてのアイデンティティーを意識するようになったものの、国家的なアイデンティティーの一部として世界に認知されているのはアイルランドのみである。

だが彼等はエスニックの統一体を成し、その結束の強さは人為的な国家や経済的、軍事的な権益に基づく共同体よりずっと確かな基底を持つ。

共通の神話や民話などの伝承の表象に支えられた出自の宿命性、そして生理的な根拠から生じる同質性。これらこそがケルト性 (Celticity) を喚起させる民族の紐帯^{ちゅうたい}ではないか。

各地域で「ケルト文化」を生きている彼等はその意味に於いて「ケルトの末裔」なのだ。

ロマン派詩人に共通して見い出される「風」のイメージを「ロマン派的隠喩」と呼んだM.H. エイブラムズ (M.H. Abrams) はこの風を「動いている空気」と言い換えている。「ケルトは森を渡る風のような民だ」と言った人がいる。風は^{とど}留まると途端に消え入ってしまう。

確かにケルトの一派のゲール (Gael) の名も「風」に由来する。

ケルト達は「森の記憶」を携え風位を東から風先を西へと取り、行跡に豊かな「記憶の森」(伝承の森羅) をヨーロッパ各地に繁茂させた。

本稿ではケルト民族の回歴を概察した上で、英国の伝承文学及びケルトの伝承文学の遍歴を辿る。その後、ケルトの抱いた理想世界の延長線上に具現化した異界のヴィジョンとその湧出点の淵源を東西の文化の対照をも加えて探察する。更に伝承文学の奥底に伏在し、人類の心に共通して伏流する精神的会流について敷衍を試み、論考を進める。

最後に援引として、ケルトの幻夢の再生 (revive) を試みる戯作を掲出する。

FOCAL THEME “SUPERNATURAL AND TRANSMIGRATION” 「超自然と輪廻転生」

Natural and supernatural with the self-same ring are wed.

As man, as beast, as an ephemeral fly begs, Godhead begs Godhead,

For things below are copies, the Great Smaragline Tablet said.

— William Butler Yeats : “The supernatural songs” P.266 —

自然界と超自然界とは全く同じ一つの輪で結ばれている。

人間、野獣、そして^{かげろう}蜉蝣達が自らの子を生むがごとくに、神もまた神を生むのだ。

大エメラルド表⁽²⁾に依れば、下界のものは上界の模倣に過ぎないのだから。

— W. B. イェイツ : 「超自然の歌」, P.266 筆者訳 —

Manytimes man lives and dies

人は二つの永遠にはさまれて

Between his two eternities,

何度でも生き、何度でも死ぬ

That of race and that of soul

民族の永遠と魂の永遠の間で

Ancient Eire knew that fully

古代アイルランドはそれを熟知した

— W. B. Yeats : “Under Ben Bulbin” —

— W. B. イェイツ : 「ベンブルベンの下」, 井淵博「イェイツとの対話」 P.233 筆者訳 —

イェイツは妖精⁽³⁾を、アイルランドを、そしてケルトをこよなく愛した。

彼はプロテスタント系アングロ-アイリッシュ (Anglo-Irish) として自身の精神の中に二重の民族意識の背反を背負いつつ、アイリッシュネス (Irishness) を広く顕示しアイルランドルネサンスを、或いは独立蜂起を牽引した。ケルトの文化や伝承は彼を強くインスパイアー (inspire) し、斬新なインスピレーションと文学的バックボーンを与えた。彼はその後一貫してキリスト教の「三位一体」を「抽象的なギリシャ的不条理」として斥けた。

第一詩に於いてキリスト教が自然界 [人間] と超自然界 [神] とを分離しようとするのに対して、「同じ一つの輪」と喝破し対峙している。また、「--結ばれている」とあるのは「婚姻」の比喩であり「混交」や絶え間ない「循環」「円」のイメージを与える。ringには「指輪」の他に「女性性器」の意味がある。

第二詩に於いては「二つの永遠」での生と死は個人としての「死」がそれ自体で完結するのでなく、民族の意識の中に残ることを暗示している。現世を超越した「永生」を、或いは「輪廻転生」を念頭に生命を謳っている。風の如くに人界と異界を旅したケルト達。そんな彼等が紡いだ幻夢に満ちた伝承や世界観は、一体どんな因果性をもって生まれたのだろうか。

1. ケルトの素描とその概史 - 歴史に於けるケルトの系譜 -

(1) ケルト民族の年歴と回歴

ケルト人 (The Celts) という名称が歴史に初めて登場したのは、紀元前5世紀ギリシャの歴史家ヘロドトス (Herodotos) の著述の中のケルトイ (kelt-oi) としてだった。これはギリシャ語の別名でガラタイ (Galatai) と呼ばれた。ローマ人からはケルタエ (Celtae) またはガリ (Galli) と呼ばれた。彼等は長身で肉が盛り上がり色白で髪は金髪であり、ゲルマン人 (German) やスキタイ人 (Skythai) のようには毛深くないと描出された。

「ケルト」の原意は「優れた者」であったが、当初文字を持たず自らの歴史の記録を残していない為神秘に包まれていた。ローマ人はケルト人の起源が地獄であり、冥府の神プルトー (Pluto) の子孫に違いないと決めつけ、ギリシャの哲学者アリストテレス (Aristoteles) は「ニコマコス倫理学」(5-b6) に於いて、ケルト人が全く自然の脅威を恐れない傾向について「一種の気狂い」「苦痛に無感覚な人」と評し、共に彼等を好戦的な野蛮人として見下した。

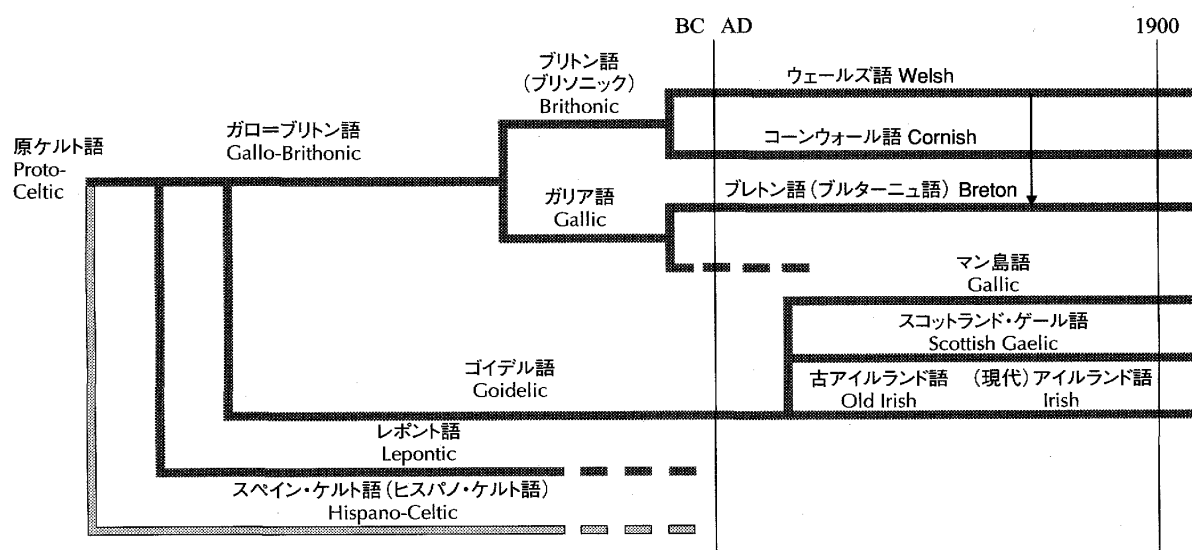
彼等は紀元前2000年から1500年頃インド=ヨーロッパ語族の一集団として、現在のチェコとポーランドの国境にあるズデーデン山脈、ウクライナとルーマニアの間にあるカルパチア山脈からフランス西部のガロンヌにかけて、アルプスの北側に広く分布した。

紀元前750年から600年にオーストリア南西部に欧州第一期鉄器文化 (ハルシュタット文化) を生み、その後紀元前475から400年にスイス東部に第二期鉄器文化 (ラ・テーヌ文化) を興し強い武力をも持つことになる。ケルトは中央集権化された国家もしくは帝国を形成せず、部族別集団や小国家を作るにとどまった。彼等がこれらの文化を発展させたアルプスの北側はゲルマン人の、東はスラブ人の、南はギリシャ人やローマ人の土地だった。紀元前400頃一時はローマ領に南進を企て成功するものの後に敗退した。その後ケルト達はヨーロッパの四方に散住し一部が融合しつつもローマ人やゲルマン人に押され、結局西への活路を求索する歴史的必然を運命づけられることになる。

ケルト人達は現在のドイツ南部を経て一部がイベリア半島へ、或いはフランスへと移動した。そしてこの流れは次にブリテン島から更には極西のエメラルドの島アイルランドへと連なる。アルプス山脈 (Alps) はケルト語のアルプ (alp/岩山)、スイスの観光地レマン湖 (Leman) もレマン (leman/にれ^{にれ} 榦の木)、西端のガロンヌ川 (Garonne) もガル (garw/荒々しい) とオン (onn/川) で「急流」の意味を持ち、その他にもヨーロッパ各地に古代ケルト語の足跡を残した。紀元前52年にローマのシーザー (Gaius Julius Caesar) の軍にケルトの指導者ウェルキンゲトリクス (Vercingetorix)⁽⁴⁾ が駆逐されて、表向き「大陸ケルト」はその時代を終える。

その後「ケルト文化」を主に継承することになるのがブリテン島に渡った「島嶼ケルト」である。紀元前55年のローマによるブリタニア (Britannia) 占領から紀元410年の撤退後の無政府状態の中、ブリテン島北部のスコット人やピクト人の外部族の侵入に苦しんだケルトの主族ブリトン人が傭兵として大陸から招聘した^{しょうへい}アングロ人やサクソン人の裏切りによって山間に追われ“Welsh”(よそ者)と呼ばれる。そんな彼等の住処は又しても更西の地ウェールズ (Wales) やコーンウォールだった。そんな中420年にはブリトン人の一部がコーンウォールから逆に父祖の地である大陸のアルモリカ (Armorica) に移住した。そこは現在のフランスの北西部のブリトン人 ([英] Briton, [仏] Breton) の住む地ブルターニュ ([英] Brittany, [仏] Bretagne) 地方として特異なケルト文化を伝える。ブリテン島のケルト人達はローマ人やアングロ人、サクソン人、或いはスカンジナビア人と緩やかな融合を漸進的に遂げる中でもアングロ=サクソン化 (Anglonize) は確実に進む。アイルランド島にあってケルト人達はローマの侵略を免れ独自のケルト文化を熟成させるが、後にアングロ=サクソン人の国家イングランドによるアセンダンシー (Ascendancy/優位支配) の下でケルト語を奪われ800年に渡って苦悩する。だが、ケルトはそのアイデンティティー (Identity) を失わなかった。「ケルト人」とはケルト語と伝承・世界観を共有する「言語、文化集団」の一単位であって形質人類学が対象とする様な「人種」ではない。彼等はその歴史の中で比類ない豪壮にして幽玄な文学的遺芳を残した。その後のヨーロッパの文学のある部分はケルトの本木に接ぎ木することで開花したと言っても良い。次にケルト語群の系統図、及び言語地図を掲出する。

資料1. ケルト語群系統図



ケルト語群の発展を示す推定図

(3) 英国と英国伝承文学の系譜

英国諸島（ブリテン島を含む）に渡り、やがて英国の伝承文学の担い手となった、或いは少なからず影響を与えた人々の系譜をまとめてみたい。

いわゆる英国民を構成する民族的な要素には、先住民・ケルト族・チュートン族 (Teutons)⁽⁵⁾ という3つの系統があり、長い年月を経て生み出された伝承文学にはそれぞれの民族的特性が明弁に反映されている。

時期	族	人・族	来歴
3000 B.C.	先住民	イベリア人 (Iberians)	イベリア半島から3000B.C.~2000B.C.頃ブリテン島に侵入し、偏平な天井石を石で支えたドルメン (Dolmen) という巨石の文化を生んだ。
2000 B.C.		ビーカー族 (Beaker Folk)	同じくイベリア半島から2000B.C.頃ブリテン島に侵入した。広口の陶製容器ビーカー (Beaker) が墳墓で見つかり命名された。両部族は融合し、1600B.C.頃までにイングランド南部の平原のソルズベリー (Salisbury) にストーンヘンジ (Stonehenge) のような巨石文化を生み、やがて後來したケルト族と漸次混淆した。これらの先住民達は伝承文学と呼べる物は残さなかったが、巨石遺構や彼等の存在自体が後の文学にインスピレーションや素材を遺すという形で貢献した。
700 B.C.	ケル	ゲール人 (Gaels)	ゴイデル人 (Goidels) とも呼ばれ上ライン地方よりケルト族第一波としてブリテン島へ。南部、東部に移住するが後続のブリトン人に北部や西部の辺境に追われ、500B.C.頃アイルランドに移動した。イングランド北部とアイルランド北東部に定着した一派スコット人は後にブリテン島の北のスコットランドで合流し、周辺の島々へと広がった。別のゲール人の一派が150B.C.~100B.C.頃からアイルランド西部に直接入島する。故にアイルランドやスコットランドの北西部で口承された物語はゲール人が生み育てたものである。
500 B.C.	ト族	ブリトン人 (Britons)	ケルト族第二波としてブリテン南部、東部に侵入しゲール人を駆逐した。長くローマ人の支配下にいたがローマの撤退後チュートン [ゲルマン族 (German) とも呼ばれる] により460A.D.頃より圧迫され、ウェールズ、コーンウォールや湖水地方に閉住させられて、一部は大陸のアルモリカへ移住する。追われ楽土を求める彼等は妖精伝説にこの世を厭い自らを慰み、部族の誇りの再興を悲願する中でアーサー王に繋がるようなブリトンの英雄説話の類を多く遺した。

500 B.C.	ケ ル ト 族	ベルガエ人 (Belgae)	ケルト族第三波としてロンドン (London) 周辺に定着。多くは農業に従事した。ロンドンの南方ケント州 (Kent) は今日でも果実や穀物を生産する穀倉地域である。彼等自身は文学的な遺産と言えるものは遺さなかったが、広い農地は後の文学に伝承の素材を遺した。
55 B.C.	Romans	ローマ人	ローマによるブリテン島の支配
410 A.D.	Romans	ローマ人	ローマのブリテン島からの撤退
450 A.D.	チ ユ ン 族	ジュート人 (Jutes)	デンマークと北ドイツにまたがるユトランド半島よりブリテン島の南東部に侵入し、ケント王国を建てた。だが、他部族より比較的に少数の勢力だった為、独自の居住圏を長く保持できず他部族と融合。
470 A.D.		サクソン人 (Saxons)	北ドイツのシュレヴィヒ・ホルンスタイン (Schleswig Holstein) 地方のエルベ川流域からブリテン島南部に侵入しエセックス (Essex)、サセックス (Sussex)、ウェセックス (Wessex) の3王国を建国した。セックス (-sex) は「サクソン人の土地」を指し、冠せられる3種の語はそれぞれ “East, South, West” を意味する。後に文豪トーマス ハーディー (Thomas Hardy) はこの土地を背景とした小説群を著した。ウェセックス王国はノルマン征服 (Norman Conquest) まで最も高い文化を築いた。
520 A.D.		アングロ人 (Angles)	サクソン人と同じ地方からブリテン島の東・中・北部に侵入しつつブルトン人を西部に駆逐して、イーストアングリア (East Anglia)、マーシア (Mercia)、ノーサンブリア (Northumbria) の3王国を建国した。ケルトの最大勢力であり3部族中最も広大な土地を占有し、部族名を内包している「アングロ人の地」(Angloland) からやがてイングランド (England) という国名をもたらすことになる。外部族との戦いも多く持った経験からか、戦闘に関する説話を多く遺した。
700 A.D.		スカンディ ナビア人 (Scandi- navians)	ヴァイキング (Viking) と呼ばれスカンディナビア半島及び南方の島々より侵入した。一派であるノルウェイ人 (Norwegian) は8世紀にスコットランド北方のオークニー諸島 (Orkney Is.) シェトランド諸島 (Shetland Is.) を占拠し、9世紀にはマン島 (Isle of Man) を占拠する。北欧文化や説話を伝え、この地方に人魚伝説が特に多い。11世紀にフランス北西部のノルマンディー (Normandy) から来寇したノルマン人 (Normans) は言語、文学面でフランス的色彩を持込んだ。

2. ケルト伝承文学の照察 ― 文学に於けるケルトの伝承 ―

(1) 英国伝承文学の諸相と氣息

我々人類が意思によって残し伝えるのが遺産 (Heritage) であり、それは城郭、寺院、家屋などの有形の物的遺産 (Material Heritage) とは別に神話、伝説、説話、民話、昔話、迷信、習俗、歌謡、舞踊、芝居といった精神的遺産 (Spiritual Heritage) がある。これら精神上的文化遺産のうち太文字のものが民間伝承 (Folklore) の中の伝承文学 (Folk Literature) と呼ばれるものである。

臨床心理学者の河合隼雄氏は「神話」の発生について、かつて著書「ケルト巡り」の中でこう述べている。「人間はその歴史の中で農業と牧畜という非自然的なシステムを創出した。それはつまり人間が自然に介入し、これを操作し始めたことを意味する。もちろん、それまで行われてきた『好きなものを取って食べる』という狩猟採取も継続して行なわれてきた。そこには動物を殺すために武器を作るという反自然性はあるものの、動物も他の動物を殺して食べてはいるので、ある意味では自然の営みと言えなくもない。しかし、農業と牧畜は明らかにそれとは異なっている。ゆえに農業と牧畜という二つのスタイルを人間が獲得するのと時を同じくして、我々が現在知っているような神話が生まれたのではないかと私は考えるのである。それまでの自然の摂理に合わせて生きていた人間に『なぜ、この行為をするのか』を説明する必要が生まれたのではないか。」

神話やその他の伝承文学は、そのような自らの行う行為の正当化の他に、帰属する種族の希求する理想世界の表象、娯楽・知識・教訓の供与、或いは現実世界からの逃避などの願望が描出された当体ではないかと考える。なぜなら伝承文学にはそれぞれの種族の自己肯定の上に描かれた理想郷と、そこに至り住むための英知、そしてそこに至れなかった時のための現実逃避が多く描かれているからである。人間は自らの種の^{いやさか} 弥栄と永続、そして安穏な生活を願う。だが現実の世界 (人界・此岸) は厳しい自然や種族間抗争といった苦難に満ち満ちている。幸いは「山の、或いは海の^{あなた} 彼方の空遠く」にあると、心理学でいうところの合理化 (防衛機制) をもって逃げを打つのだ。実は逃避も自己肯定の持続の延長線上に生起する。伝承文学に共通する主な特徴は、①作者が不詳であること ②口承されたものであること ③民衆の特性を反映していること があげられる。長い間に作者の名前が忘れられ、その後追加・改変が行われ親から子へ、子から孫へと通時的に、或いは同世代の者の中で共時的に伝え合っていく。当初は口頭で、後に文学者や民族学者、研究者が採話の結果として文字で示すようになっていったのである。

同一地域内で長く伝えられ親しまれてきたものである為、その土地の民衆の性情や嗜好、価値観、思考傾向などを様々に反映する。だが、いずれも人間の創作したものであるから、種族、民族を超えた共通の本性や心理の鮮明な投影を見出だすことがある。

次にケルト伝承文学をも含めた英国の各伝承文学の特性をまとめてみる。

神 話
(myth)

人間は人知を超えた大きな力の存在を信じ畏怖し、それに神格を与えた。ケルトは「あらゆるものは流転し転生する」という考えを神話群の中に多く織り込んだ。種族の占有する土地、種族や民族の成り立ち、更には宇宙や自然に至るまでを神の行為に帰して説明し、信仰的な物語として完成させた。英国伝承文学の中の神話のルーツを大別すると、①ギリシャ・ローマ神話⁽⁶⁾ ②ケルト神話 ③チュートン（ゲルマン）神話となる。これらの神話は聖書と並んで人々の心の糧となり教養の源泉として英国民の間で伝承されてきた。英語で「内緒で・秘密に」の意味を持つ“under the rose”（バラの下で）という句はローマ神話の愛の神キューピッド（Cupid）が母ヴィーナス（Venus）の情事を口外しないよう沈黙の神ハーポクラテス（Harpocrates）に頼んだ。そして謝礼としてバラを贈ったというローマ神話に由来する。英国の宴会場の天井にはよくバラの彫刻があり「宴席の話は内密に」と戒めて今に生きる。

伝 説
(legend)

土地・自然・人工物・出来事について、その生成の原因や由来、或いは因縁[崇り・利益^{りやく}]を奇跡的、超人的な性質をもって語る説明的な言い伝えである。原則として定時性（時代的特定）と定域性（地理的特定）があり、ある事を見聞きした人の感銘や驚愕を通して部族の集団目的を伝える。事柄や印象を簡明直裁に伝える為、複雑な筋を持たず神話や民話より短い。神話や英雄説話と同じく、過去の一時的な事件を述べるのを特色とする。

英雄説話
(hero's tale)

人間でありながら超人的な体力や知力を備えた英雄が主人公。多くの場合に両親のどちらかが人間以外のものであり、苦難に満ちた中で怪物を退治したり武勲をたて、波乱に満ちた生涯の悲劇的な死を遂げる。国家や民族に貢献した勇者を散文や叙事詩の形で語り神中心の神話と人間中心の民話の中間位。ケルト世界では「アーサー王物語」（Arthurian romance）やアーサー王物語と融合した「トリスタンとイゾルデ」（Tristan and Isolde）などがある。

民 話
(folk tale)

定時性、定域性を持ち、ある地域社会〔集落・部落など〕の内部で起こった出来事などが民衆の間で語り伝えられる。その過程で改変や脚色が加えられ、人々に感銘を与え興味を湧かせ、しかも共感を呼ぶものだけが残ったようだ。人間世界（人界）の中の人間を中心に据え、そこに妖精・怪物・悪魔・幽霊・人魚・魔女・巨人などの異界に属する精霊的な存在を絡め、ある程度組み入れた筋を持っている。

支配者層ではないまさに民衆の中から生まれ民衆によって育まれ伝承されてきた物語群であるのだ。だから描出される異界の者達の性情や癖や振る舞いの多くに、身近な人間のそれらによく似たものを見出すのである。

民話に一番特徴的なことはその高い娯楽性にある。ただ民話は単なる作り話でなく何らかの事実に基づいて発生しており、基本的にはノンフィクションであることが多い。中にはわずかな事実をヒントに脚色を施し興味深い筋立ての物語に仕立てたものもあるが、やはりそれらも広義の民話の部類に入であろう。

昔 話
(fairy tale)

「昔々あるところにー」(Once upon a time, there was ー) という枕言葉で「これから話すことは日常の話ではありませんよ。ちょっと違う世界（異界）に入り込みますよ」とエクスキューズ (excuse) をする。そして話し終えて、「ーになったとさ」と気付け薬 (smelling salts) を嗅がし日常に戻してやる。これは聞き手が非日常の世界と現実の世界を混同しないようにする為の儀礼なのだ。子供騙しのようなが昔人の世界は我々が考える以上に豊かな精神性と蒙昧とが渾融していたのだ。自然の世界（人界）から超自然の世界（異界）に足を踏入れるためには、2つの (twi-) 世界からの光 (light) が朧に混じる「トワイライト ゾーン」(twilight zone) と呼ばれる境界帯を越えて行く。神話の如くな宗教色は薄く、伝説にみられる歴史性もない。定時性、定域性、にも乏しく類型的人物を登場させる。一般に超自然的な力で主人公が動物に変身させられ、やがて魔法が解かれるという話が多い。17世紀末のフランスの宮廷で王侯のロマンスや魔法による変身の物語が流行し「妖精物語」と名付けられたものが英国に伝わり、そのまま英訳され“fairy tale”として定着したものだが、実際には民話ほど妖精は登場しない。物語としては単純で興味本位であり、娯楽性を重んじて早いテンポで進行する特徴がある。

次に各英国伝承文学が包含（具有）する傾向性を特性別に比較してみることにする。

各記号は特性の程度を示す。

- ◎ → 特に多く含んでいる
- → 多く含んでいる
- △ → 多少含んでいる
- × → 殆ど含んでいない
- * → 特にケルトに於いて強い特性を示す

特 性 伝承文学	宗教性 信仰性	民族性 部族性	教訓性 知識性	娯楽性 慰安性	定時性 S.T.	定域性 S.P.	神秘性 異界性
神 話	◎	○	△	×	×	○	◎
伝 説	△	○*	◎	×	○	◎	◎
英雄説話	△	◎*	◎	×	△	○	○*
民 話	×	△	○	◎	○	◎	◎*
昔 話	×	△	△	◎	×	×	△*

※ウェールズの口承物語集「マビノギオン」(Y Mabinogion)のように神話・伝説・民話のいずれもの要素を含んでいる大散文集などもあり、すべての伝承が上記のように弁別できる訳ではない。

英国の伝承文学の一角を成すところのケルトの伝承は他の特性に関しては大きな差異はないものの、民族性（部族性）、それに取り分け神秘性（異界性）に関して特に顕著な一般性や多様性が見て取れる。

(2) 神話と民話と伝説と —

今ここにケルト世界を形成する有力な地域を中心にイングランドをも加え、そこに生み出された伝承文学のいくつかを掲出する。それらを通して伝承物語のサブスタンス(substance/実体)を披読してみたい。また更に伝承中に描出される異界性の多様の披見をも試みる。ここでは地域による特色や差異をより平明にするため、おもに定域性の高い民話を選取することとする。なお、成立年は古くから口承されてきた伝承が文字で記録された時期を表す。

地域 (成立年) (Area/era)	表 題 (Title)	背 景 (Scene)	登場人物 (Charactor)	異 界 性 (Eeriness)	注 釈 (Annotation)
Scotland (F)民話 17th C. A.D.	竜 の 岩 Dragon Rock	ハイランド 西部の溪谷 ヴァイル山	船乗り チャールズと 雌ドラゴン	・ドラゴン ・数百キロ離れた子供のドラゴンの悲鳴を聴く超聴力	ハイランドのグレン・コーに通じる山の麓の奇岩と窪みのある平らな岩は景勝として残る。
Scotland (F)民話 15th C. A.D.	マル島の水魔 Devil of water in Malu	スコットランド 西部のマル島	水魔と美貌の娘 漁 夫 村 人	・水魔と化身 ・魔法で変化した馬具の色々 ・深海の別世界 ・亡霊達	ドゥルイド教の（ベルテーン祭）の日、浜に白馬を走らせる亡霊が出現すると言われる。
Wales (M)神話 (L)伝説 11th C. A.D.	スイールの娘 ブランウェイ Branwen Vench Llyr	ウェールズ沖 の島々	スイールの王 ベンディデイド イウェルゾンの王マリルッフ、 ブランウェイン	・死んだ兵士を蘇らせる大釜 ・言葉を諳じる小鳥 ・巨人兵達	再生の大釜は死者を蘇らせるが口はきけない。[摂理に反して何かを得ると、何かを失う]
Wales (F)民話 10th C. A.D.	ハシバミの杖 Hazel stick	西ウェールズ 小さな村の郊外	牛飼いの若者 ドゥルイド僧 アーサー王と家来の戦士達 村 人	・ドゥルイド僧の透視と予言 ・地下で戦闘に備える死せる戦士達 ・妖 精	ハシバミには霊力が宿るという信仰。サクソンに勝利するという歴史事実と反するケルトの民族的願望が見える。[貪欲=不徳]
Ireland (F)民話 16th C. A.D.	一枚の銀貨 One silver coin	アイルランド 南部のコーク州 バリデホップの小さな町	ある男 敬虔なカソリック教徒達 踊り好きなアイルランドの人々	・亡霊と死臭 ・伸び縮みして可塑性のある時空間 ・闇夜の幻視	この種の話は月のない夜の設定多し。銀貨は人界と異界をオーバーラップさせる媒介物としてよく用いられる。[亡者の此界執着]

梗概 (Synopsis)
<p>ヴァイル山の中腹の窪地に棲む雌竜が旅人を捕って喰う。そこで船乗りチャールズが浜から沖の船まで槍を付けた空樽を浮かべ船橋を造る。そして船上で肉を焼いて竜をおびき寄せて八つ裂きにしてやった。その後死んだ竜の子が成長して数匹の子を生むが、又してもチャールズが窪みにいた子供を麦藁で焼き殺すと、遠くで悲鳴を聴いた母竜が助けに来たが既に遅かった。母竜は悲しみの余り絶叫し、岸辺の平らな岩に自らを鞭打つ様に何度も当たり死ぬ。</p>
<p>祭りの夜白馬にまたがった美しい若者が一人の美貌の娘を見定め、やにわに鞍に乘せ暗闇を駆け去る。暗い浜辺に来ると若者は下馬し、娘に永久に自分のものになってくれと懇願する。その声は遅しくその目はどんな女をも虜にするのに十分な程澄んでいた。しかし強烈な海の香りを帯びるその若者を水魔の化身だと娘が見破ると、鞍は海草に、^{おもて}面繫は真珠、^{くつわ}轡は珊瑚に変わってしまう。若者は娘を緑の海に連れ去り、翌朝漁夫が娘の亡骸を見つけて手厚く葬る。</p>
<p>イウェルゾンの王がスイールの王の娘ブランウェインを妃に迎え同盟を結び王子が生まれる。しかし王妃は虐げられた生活を人知れず送っていた。ある日王妃は小鳥に言葉を教え父王に救いを求める。両国は戦いの剣を交えた。イウェルゾンの王は再生の力を持つ大釜に死んだ味方の兵を投げ入れては蘇らせ優勢に立った。だが誤ってまだ息のある兵を投げ込むと釜は轟音をあげて4つに割れてしまう。それと共に蘇った兵も骸骨となり結局スイール軍が勝つ。</p>
<p>ハシバミの木で作った杖を片手に家畜を連れ旅をする若者に、一人のドゥルイド僧が声をかけた。そのハシバミの木の下には莫大な宝物があると言う。二人でハシバミの木の^{かつちゅう}ある場所を掘ると、大きな部屋がありそこにアーサー王と甲冑を身に付けた戦士達が眠り、更に奥に金貨と銀貨の山があった。そのすぐ右脇には鐘もあった。万一それに触れて戦士の一人でも目を覚まし「戦か？」と尋ねたら「まだ寝ておれ」と言うよう、そして二度までしか宝を取りに来てはいけないとドゥルイドは教えた。だが若者が三度目に部屋に入った時鐘に触れてしまう。すると眼孔が空ろな戦士達が一斉に「ウェールズが危ないのか」と言って起きだす。</p>
<p>ある男が牛を買いに定期市に出かけたが途中で日が暮れてしまう。月のない星空の美しい夜一軒の家を訪ねると、中ではヴァイオリンに合わせて人々が踊っていた。男はドアの近くの美しい人を誘い手を取って踊った。とても楽しい一夜を過ごして、まだ夜が明ける少し前にお礼に銀貨を一枚残し家を後にした。市で牛を手に入れた後人々にあの家のことを尋ねるが誰も知らないと言う。知っている様子の人でも話したがらない。帰路あの家のあった所に立ち寄るが別の家と住人がおり、数十年前までそこに人々の集まる社交場があったが火事で消失し多くの死者がでたこと、そして朝方暖炉の上に銀貨が一枚あったことなどを聞かされる。</p>

地域 (成立年) (Area/era)	表 題 (Title)	背 景 (Scene)	登場人物 (Charactor)	異 界 性 (Eeriness)	注 釈 (Annotation)
Ireland (H) 英雄 説話 12th C. A.D.	悲運の クーフリン Cuchulain	アイルランド 北部アルスター の小国	半人クーフリン 怪力の女戦士 コノール国の王 凄腕の若武者 怪力の女戦士	・ 神族の血を引 いて半ば人間 半ば妖精とい う出生の存在 ・ 人間離れした 怪力の女戦士 ・ 驚異的な成長	クーフリンの父は 神族、母は妖精の 国に姿を消した乙 女「ク」(Cu) だ った。“Cu” はゲー ル語で「犬」の意 でIrish名に多用。
England (Fairy T.) 昔話 6th C. A.D.	親指トム Tom Thumb	イングランド 南部の小さな 村	魔法使いマー リン、 魔力で親指ほ どの背丈にさ れてしまった 男の子	・ 魔法使い ・ 小人 ・ 極小の馬 ・ 酔う水 ・ 大毒蜘蛛	アーサー王の話は 広くブリテン島中 に広まっていた。 クモの毒は王の兵 が善戦するもサク ソンの矢に倒れた 悲哀が背景にある。
England (F) 民話 13th C. A.D.	闇夜の格闘 Moonless night scuffle	コーンウォール 西南のペンザ ンス	炭坑夫 馬に跨がる黒 衣の男、 悪鬼のような 形相の闘士達	・ 岩を透過する 魔術的な行い ・ 明らかにこの 世の者でない 黒衣の男と闘 士達 ・ 轟音と地揺れ	コーンウォールは アングロサクソン に追われ住んだケ ルトの地。赤い目 は「悪魔」を西は 「暗黒と死」を暁 光は「神」を表す。
Brittany (L) 伝説 (H) 説話 13th C. A.D.	ポンチェスの 物語 The story of Ponchoes	ブルターニュと スペイン北部の ガリシア地方	ガリシアの王子 ポンチェス、 ブルターニュの 王と王女シドワ ース、 イングランドの 王、 13人の少年	・ バラントンの 不思議の泉 ・ 未来予知 ・ 雲ひとつ無い 空に轟く雷鳴 ・ 晴天に降る雹 ・ 荒海に湧する 天からの声	古ブルターニュの 建国叙事詩を成す。 泉が格別な霊力を 持つ摩訶不思議な 異界への出入口と なる。泉はブルタ ーニュのアイデン ティティーの源泉。

梗概 (Synopsis)
<p>捨て子のセタンタ (Setanta) はコノール (Conor) 王に拾われ宮廷で育つ。7歳の時襲って来た猛犬を倒し勇気を称えられクーフリン (Cuchulian) という名を与えられる。影の国で武技を磨いている時怪力の女戦士エーファ (Aifa) の挑戦を受け勝利する。そして彼女が自分の恋人になり子を産むことを条件に命を助ける。その後生まれてくるであろう息子に指輪を残しアルスター (Ulster) に戻る。クーフリンは数々の武勲をたて王の信頼を得る。数十年後王を守るためにある凄腕の若者を倒すよう命じられる。死闘の末に辛くも勝利したがその強さはかつての女戦士エーファ以来のものだった。腹に槍を受けた若者の指にあの指輪を見つける。</p>
<p>魔法使いマーリンが親切な子のない夫婦の家に一夜の宿を願い出る。夫婦は心尽くしの食事 で彼をもてなした。お礼に彼は夫婦に親指程の背丈の男の子を授ける。夫婦はトムと名付け、大切に育てたが体は成長しなかった。やがてトムはアーサー王の城に招かれ「サー トマス」と呼ばれて王の寵愛や城内の人々の人気を一身に集める。それに嫉妬した王妃はトムの身に覚えのない中傷や噂を王に吹き込み彼を死刑へと追い込む。だが、持ち前の機知で王を感心させ辛くも死刑を免れる。トムはその小さな体を生かして王や国のためにも大いに活躍する。親孝行も怠らない彼への魔法が遂に解けんとする時、大蜘蛛との戦いで毒により命を落とす。</p>
<p>二人の炭坑夫が仕事を終え、町の酒場に向かう途中、ケルン (Cairn / 塚山) を通りかかるとゴーゴーという不気味な音の中、馬に乗った黒衣の男に出会う。その男は向こうの石山で行われる「組み打ち」[相撲に似た闘技]に一緒に行こうと誘う。なんと岩山を透過して広場に来ると両頬に塗りものをした悪鬼の様な形相の闘士達が戦い合っていた。低く唸るような風の中で剣や斧で殺し合うその闘いは、鬼気迫るものだった。闘いを仕切っていたのはあの黒衣の男だった。倒された一方の闘士を哀れに思い、明け方坑夫がキリスト教徒の祈りを口にした途端、轟音と大地の揺れが起こり黒衣の男の目が真っ赤に輝き西の空に飛んで行った。</p>
<p>イベリア (Iberia) のガリシア王国 (Galicia) がバビロニア (Babylonia) に攻め陥とされ、王は死に幼い王子ポンチェス (Ponchoes) は13人の少年と共に嵐の海をブルターニュに逃れる。高貴な美しさを備える彼をブルターニュ王は立派な騎士に育てる。彼は後に王女シドワヌと恋に落ち王も二人を許す。だが彼は仲間の裏切りによりプロセリエの森に追われ、そこで不思議の泉の力を受け未来を悟り剣術の腕を磨く。数年後彼はイングランドに渡り王に仕え信任を獲得する。彼は王から譲り受けたブリトン人の戦士達と共に生国を奪還してガリシア王に返り咲く。年を経て再びブルターニュに行き裏切り者の首をとり、シドワヌと結婚を果たした。その後彼の長男の系図がガリシアの、次男の系図がブルターニュの王の冠を戴く。</p>

(3) 伝承文学の役儀とケルトの異色性

英国の伝承文学を長く語り継ぎ今にまでその氣息を絶やさなかったのは次の様な事由と思念があったからと考えられる。

A 娯楽・慰安・勇気を庶民達に与える為

- ①生活に潤いを与えることを目的とし、特に北国の冬の夜長を楽しく過ごさせる。
- ②生活に伴う苦勞を忘れさせ夢や希望を与えると同時に、ある種の逃げ場とする。
- ③教会で牧師達が単調な説教に挿入して、聴衆の関心をつなぎ居眠りを防止する。

B 知識を伝えたり知識欲を満足させる為

- ①取り返しようもない事故や死を魔女や異界の怪物や妖精の仕業にし納得させる。
- ②原因の分からない病気などが流行した時に、民間療法の知恵を盛り込み与える。
- ③見知らない外世界や風習に関する大まかな知識を与え、知的欲求を満足させる。

C 教訓を与えたりおきてを分からせる為

- ①民族、或いは部族の歴史を伝え、民族愛・祖国愛・先祖崇拜の念を植え付ける。
- ②道德心を涵養し[嘘をつくな・欲張るな・家畜を大切にしろ等]怠ると祟りや不幸に遭うと畏怖させる。
- ③信仰心の育成のため、人知を超えた存在や聖者の功德や篤信者の幸運を教える。
- ④社会や人生の条理[ルール・上下関係・賞罰・慣習・人情・運命]を教え、よりよい構成員を育成する。

以上のような目的や意図をもって英国の伝承文学は創作され語り継がれてきたのである。特にケルトの伝承は、異界の住人達を物語の主役や脇役に頻繁に登場させる傾向があった。

だがケルト圏の伝承文学や幻想古譚も地域によって味わいが少しずつ異なっている。次にその表象と異色性を地域ごとに概観してみたい。

スコットランド

スチュアート王家の命運の通り、結局はイングランドと表面的には結合し、済し崩し的にスコットランド魂を消し去られた。高地地方という地理的条件も重なり陰鬱で悲しい幻想にあふれている。水魔 (Devil of water)・魔法使い (Wizard)・幽霊 (Ghost)・妖精 (Fairy) 怪獣 (Monster)・竜 (Dragon)・アザラシ (Seal) などの海獣をその正体とする人魚 (Mermaid, Merman) などを登場させる。

ウェールズ

ブリテン島の西南部の山岳地帯に位置し、英国の中でも比較的温順な土地柄に根を張った住人達の特徴は閉鎖的な気風ながら楽観的である。ゆえに文学的傾向もギリシャ・ローマの地中海のロマンチズム (Romanticism) に近い幻想を備える。巨人 (Giant)・魔女 (Witch) 英雄の霊 (Ghost of Hero)・悪魔 (Demon)・森の精 (Spirit of forest) などを登場させる。

アイルランド

ブリテン島の西に位置する北海道よりやや大きい島である。農民や漁民の生活に密着し、妖精達の行動も明るく誇り高い。ローマの侵寇は免れたもののイングランドの支配に長らく苦しめられた末、北部のアルスター (Ulster) 地方を英国に割譲しエメラルドにも例えられるこの美しい島にヒビを入れるという歴史を持つ。海に囲まれ独自の高い文学性を昇華させた北方ロマンチズムの幻想を形作る。妖精・小人 (Dwarf)・半人半妖怪 (Semi-goblin)・悪魔・亡者 (Dead)・自然霊 (Spirit of nature)・海の妖怪 (Spectre of sea) などを登場させる。

ブルターニュ

かつて多くのケルト同胞達のヨーロッパ大陸に於ける最後の楽土であり民族の砦であった。この地は幾筋ものヨーロッパの歴史の中で衰え、時にコーンウォールからの移住者達によって再び盛り返しがたてフランスの文化の波間に消えていった。そんな歴史から文学はフランス南部に流行した宮廷ロマンスにつながる騎士物語が符合する。多民族から多くを取り入れたスケールの大きい神話的幻想の香りを持つものが多い。精霊 (Spirit)・黄泉の国に通じる泉 (Spring to the underworld)・妖精・悪魔・半人半妖怪・小妖精 (Pixy) などを登場させる。

これらを端的に概括すればおおよそ次のようになるだろう。

スコットランド → 悲観的で暗く、極地性の強い神秘主義 / ウェールズ → 楽観的で明るく、英雄性の強い神秘主義

アイルランド → 島嶼的で狭く、独自性の強い神秘主義 / ブルターニュ → 大陸的で広く、順応性の強い神秘主義

異界の住人である妖怪や悪魔、そして多くの魑魅魍魎^{ちみもうりょう}は古代からのあらゆる現象の根源の擬人化、未知の物事に対する恐怖心、或いは知的欲求不満などに起因する焦慮感から生れた。彼等は百鬼夜行し空を飛んだり地中や水中に住み「変身・消失・透視」などを行い、呪術をもって人に「予言・誘惑・悦楽」を施し、善や悪を行った。キリスト教がもたらされて後に異教のケルトの神々の一部は地上に降りて妖精となり、引続き神話や伝説の中に生き長らえて一部はキリスト教と融合した。そのある者はケルトの十字架の中に姿を刻まれたりもする。妖精や妖怪はケルトの神々の零落した姿でもあるのだ。だがしかし、ケルトの十字架はただ単にキリスト教の十字架をシンボルとせず、ケルト達の使っていたシンボルである輪廻の輪 (Wheel of life) に十字がはめ込まれたものなのである。

3. ケルトの閃影と真影 — 理想と深層に於けるケルトの幻想 —

(1) ケルトの肖像と理想

ケルトは現代のヨーロッパ否、世界の大多数の人々とは異風の精神世界を持っていた。キリスト教的精神、或いは現代につながるギリシャ・ローマ的精神は「昼と夜」「光と闇」「善と悪」と言うような物事や現象を二項立てでとらえて世界を弁証法的に理論化してきた。ケルト的精神はそれとは対照的に、現実の背後に現実を超越した異界を見ていた。「人界と異界」「光と闇」の境は濛昧で「昼と夜」を月で計った。⁽⁷⁾「宇宙の実体は水と火が交互に支配する現象の絶え間ない変動の下で常に不変であり、物質と靈魂は永遠である。そして人間の魂も転生に委ねられている」とドゥルイドは教えた。

ケルトの持つ異界のイメージは次の様なものだったと思われる。[ここでは特に理想世界としての異界を指す]

- ・ この世(人界)と地続き、或いは地底や湖底 [内陸部に住むウェールズ・ブルターニュ] 海底や水平線の彼方 [臨海部に住むアイルランド・スコットランド] にあると考える。
- ・ 時として「死」という戸口を通らずに出入りができる。
- ・ 時間の流れが極めて遅い、或いは全く存在すらしない。
- ・ 不老不死で病気や悩みや苦しみ、労働等とは全く無縁。
- ・ 美景で四季にかかわりなくいつでも果実に満ちている。

口承の文字筆記の時代に移行する前の紀元0年の頃の説話団の中にケルトの理想郷を見る。

Nignath ecoiniud na mrath	だれも知るその地では
hi mruig denta etargnath,	嘆きなく 不信もない
ni bii nach gargg fri cruais,	粗暴なく 艱難もない
acht mad ceul m-bind frisben cluals.	ただ心地よい甘き調べのみ

Cen boron, cen duba, cen bas,	苦悩なく悲哀も死もない
Cen nach n-galar cen indgas,	病も衰弱もない
is ed etarane n-Emne,	そこそそがエヴナの証
ni comtig a comamre.	ああ、何と不思議な理想の地よ
— Imram brain 9-10, Anon —	—「ブランの航海」序説. 口承 筆者訳—

苦悩に満ちた人界がポジ (positive) の世界だとすると、すべてから解き放たれている異界はネガ (negative) 世界であり、この世に陽画を映し出す為の陰画原板の様なものだったろう。異界こそがむしろ本来在るべき理想の地であり、そこに向かって旅立つことがケルト精神の本質ではなかったか。そしてそれ故に多くの異界への旅の伝承を生んだのだと思われる。元来が遊牧の民である彼等は常に地平線の彼方に思いを馳せ、一所に^{とど}停まらずついには極西の地にたどり着いた。この旅は冒険であり生きる為の闘いであった。また、彼等にとっては人生＝冒険であり、旅は人生そのものだった。ケルトにとって新たな世界 [その延長線上の異界も含む] へ向かって旅をすることこそが理想の人生を追い求めることに他ならなかったのではないか。

苛烈な苦行を己に課すドゥルイドやケルトの修道士も、自己の実現と理想社会を目指して進んで試練に立ち向かうアーサー王の騎士達や伝承に登場する英雄達も、みんなこのような意味での「旅」を生きてきた者達と言えよう。

次に彼等ケルト達の考える理想の人間 (旅人) 像が描かれている詩を掲出する。

資料 3. Liber Dni Jacobi Macregor [Extract] リスモール司祭ジェームズ・マグレガの書 [抜粋]

Decani Lismoren

(同書27ページにある編纂者の署名)

Actor hujus Ossane M'finn

この作者はフィン王の息子オシアン

Sai la gus in dei oy nach vaga mai finn

フィン王に会ってから昨日で六日目になる

Chanaka rem rai sa boo zar lyn

王ほど勇猛な者にこれまで会ったことがない

Mak neyn oeheik ree nythwollych trom

テーケの娘の子、強い戦士の王

Meddi is mo raith mo cheyl is mo chon

王こそわが熱意、わが光、わが分別、わが思慮

Finn fla re mo vane fa treach er gych ter

勇士フィン王、一族の王、諸国を切りすむ者

Fa meille mor marre fa lowor er lerg

大海の巨獣、陸地には大きすぎる

Fa shawog glan geith fa seith er gi carde

風に翔ける清い鷹、あらゆる技にすぐれ

Fa hillanich carde fa markyth nor verve

丁重で、正直で、憐みの心が深い

Fa hollow er zneith fa steith er gi scherm

行動的で、どんな騒ぎにあっても落ち着いている

Fa fer chart a wrai fa tawicht toy

判断はごく正しく、国はよく治まっている

Fa hai in techter ard er chalm is er keol

どこへ行っても武芸や音楽でならぶ者がなく

Fa dwlta nyn dawf o zaik graig ni glar

船から上陸する異国の敵を撃退する

A kness mir a galk a zroie in ross

肌は白堊のようで、頬は紅薔薇、眼は青く澄み髪は金色

Fa hollow dwle dawf is doonna fa haryth nyn aw

行動的で女性に優しい、王こそ人々の喜び、人々の幸福を守る者

— “DANA OISEIN MHIC FHINN” —⁽⁸⁾

— 「オシアン」(ケルト民族の古歌) P.473 中村徳三郎訳 —

(2) ケルトの幻想とカルトの神秘

古より我々人類は物的世界としての「人界」、すなわち「この世」(this world) に対して、想像により感得される心的世界として「異界」、すなわち「あの世」(the other world) という概念を持っていた。そもそも「界」とは「物事の別れ目・境界・際」を意味し、我々の存在の最も顕著な「境界」こそ「生と死の際」ではあるだろう。

仏教では生死を繰り返す迷いの世界としての「此岸」と煩惱を断じた迷いのない絶対的な静寂の世界として西方十万億土（西方浄土）にあると信じられる「彼岸」とがある。「異界」は「極楽・他界・冥界・魔界・霊界・幽界・来世」などの異名でも表現され、宗教上では死後赴く世界と見なされる。キリスト教では死後昇天する異界が「天国」で遙か天空の高所にあり、「地獄」は地下にある異界だ。しかしイスラム教ではこの二つの異界は全く逆の場所に位置する。死んでまで生前と同じく太陽に照りつけられる高所に行くより、涼しい砂漠の砂の下で魂を安らわせたいのであろう。ケルトの伝承文学にある異界は生きた人間でも出入りができ、極楽は悦楽・恍惚・美景の不老不死の境地として描出される。そしてそれは遙か西方の水平線や地平線の彼方、海底や湖底、或いは山腹の洞窟や霧の彼方に在るとされる。日本の原始宗教に基づく俗間信仰では死者の霊は人界の近くの森や丘や谷など葬られた場所にとどまって、そこが異界で盆の季節には生前の家に帰ってくると信じられている。いわば「あの世」と「この世」は地続きで極楽や地獄もこれに連なる場所、つまり人里からあまり離れてはいない山中にあるという土俗的観念が根強い。これはアングロ・サクソン人の伝承文学に見るものと類似している。また、異界では時間の経過が極めて遅いか或いは止まっていると考えられているが、死者の霊が異界へと旅立つのは没後50日前後であるとする共通の理解が多く民族の文化にあるのは大変興味深い。

一般に人界から異界への最も明瞭な越境のきっかけは「死」なのだが、ケルトの世界では「睡眠・昏睡・仮死・失神・恍惚・驚愕・極めて強い心痛や喜悦、疲労・酔い」などにより生きたまま異界へ入り込み再び生還したり、永久にそこに留まったりするとされる。これは異常な状態に陥ることで夢想状態となり、正常な普段の生活圏で出会う者以外の何かとかかわり、交信し、そこに在り、影響を受けたということを意味する。だが、異界とはただ単に人々の想像力や空想力が生み出した遠境なのだろうか。それとも、特殊な精神状態の下でのヒステリックな興奮が見せるファントム (phantom/幻視) なのだろうか。いや、安軽にそう断ずるだけで事足りるものではないように思えてならない。にわかには信じられないような、一見ナンセンスで摩訶不思議な現象や存在や世界の記述や伝承の数々。それらを我々人類はあえて好んで創出し、なんと多くを偶有していることか。創出には何らかの必至が存在する。

(3) ドゥルイドと異界のヴィジョン

ケルトは自然界のあらゆるものに神性を認めて、靈魂崇拜 (animism) をする多神教であるドゥルイド教 (druid) を信仰していた。神様の数も実に400神以上を数える。その語源には諸説あるが、前部のドゥルイ (drui) は古代アイルランド語でギリシャ語のドラス (drus) と関係があり「樅の木」を意味し、後部のイド (id) はインド=ヨーロッパ語の「知恵・知る」を意味するウイド (wid or uid) から来ており、「樅の木の知恵を知る者」「大いなる知恵者」という意味を表すというのが有力である。ケルトは一般に樅の木 [アイルランドでは榛の木も含む] を神聖視し、神がそこに植えたと思われる宿り木には特に靈力があり万能薬であるとした。宿り木の長い緑の葉や黄色い房になった花が樅に巻き付き、冬の不毛な自然の中で際だった生命のイメージはケルトの不滅の教義の体現とされた。冬の開花期に選ばれたドゥルイドの手により、黄金の鎌で刈り取られ祭儀に供えられた。

フランスの比較神話学者ジョルジュ デュメシル (Georges Dumézil) は「インド=ヨーロッパ語族の民族には共通して世界を①聖性 ②戦闘性 ③生産性の三要素から成り立つもの」と考える三機能イデオロギー、或いは三区分世界観があった」と唱えた。

ケルト民族の社会も①ドゥルイド (祭司) ②騎士 (戦士) ③平民 (農・牧民) の三階級に区別されていた。更にドゥルイドは①ドゥルイド (神官・司祭・裁判官・医術者) [白衣着用] ②バルド (bard/記録者・詩人・語り部) [青衣着用] ③ヴァート (vate/占星術師・予言者・生け贄導師) [緑衣着用] の三つの職能に分かれていた。彼等は20年かけて膨大な学問を学びすべてを諳じ、仮死を伴う多くの苦行を経て秘儀の伝授を行うエリート集団だった。太陽信仰・靈魂不滅・輪廻転生を教本に宇宙の創成や天文、哲学を説き魔術や妖術をもってケルトの民やローマ人達を畏れさせた。彼等は神学者であり、哲学者であり天文学者であり文学者であった。そして異界のヴィジョンの語り部 (story teller) でもあったのだ。

ドゥルイド教の最盛期はラ・テーヌ文化が形成された頃 [475B.C.] からアングロ サクソン人の傭兵達が北方のピクト人 (Pict) やスコット (Scot) 人と手を結び南部のブリトン人への攻撃が始った [460A.D.頃]、或いはブリテン島にキリスト教が伝えられた紀元5世紀頃までだ。

ドゥルイドが行った呪術・靈視・靈媒・感応・予言・占星やその他の奇跡・治療・教学等の秘技や密儀に関する奥義を記した資料はほんの一部が今に伝えられているのみである。

しかし、これら異界の輩の行儀と目される秘技、秘伝のいくつかは現代の英国やヨーロッパの各国の秘密結社 (secret society) のメンバー達によって相伝され再現されているのである。現代にドゥルイドを蘇らせようと活動を支えているのは、主にヨーロッパの知識階級である。

[ドゥルイド僧教団には時の首相チャーチル (Sir W. Churchill) も所属した。彼等は現在も夏至の日にストーンヘンジに集結し儀式を行うなどの活動をしている]

(4) 日本とケルトと輪廻転生

我々日本人が背広を初めて目にしたのは江戸時代、そしてその袖に初めて手を通したのは明治時代のことである。「背広」の語源はロンドンの縫製工場や洋装店舗が多く集まる街区「サビルロウ地区」(Savile Row)であるそうだ。また「簿記」の語源はブック キーピング (book keeping) であった。このように明治以降怒濤のように舶来の言語が移入された。一方、日本語の「ラーメン」などは“ramen”として英語の市民権は得てはいるものの、その元は中国語の「拉」[引っ張る] された麺から生れたものだ。カラオケに至っては歌のない「空」のオーケストラ (orchestra) の意味で日本語と英語が合体され、短縮されて、更には中国大陆に上陸して「^{から}カラOK」という語にまで進化? した。カラオケの後ラーメンでも食べるのだろうか。「^{おん}音」に簡体文字が宛がわれ、その上威勢良く語尾に“OK”という英語まであしらわれ、多国籍な語となりグローバル トренд (Global trend) となった。これらの言葉は、異なった言語や文化の交誼のプロセスの中で生れたものである。言語だけでなく伝承文学にあっても、文化的コンタクトや交誼を経て似たような民話や伝説を生み出すことがある。これはもちろん時代的、地理的、民族的に近いもの同士の間でより頻繁に起こる。だがしかし、時として接点を持ちづらい、又は有り得ない民族同士がほぼ同じ様なモチーフ (motif) やプロト (plot) を共有した伝承文学を生み出すことがある。例えば陽が昇る日本の地と陽の沈むケルトの地は宗教的かつ文学的に似通った精神に根差した伝承が特に多くある。ケルト版浦島太郎では、アイルランドの西部に住むオシンが白馬にまたがり不老不死の国に行きそこの王女と3年間暮らす。その後故郷が恋しくなって土産をもらい帰る途中、決して馬から降りてはならないという禁を忘れ三百歳の老人になる。竹取物語でこの世は月世界で罪を犯した罪人が流される配流の地で、「^{きたな}穢き所」として描かれるのもケルト版が酷似する。その他「羽衣伝説」「舌切雀」「瘤取り爺さん」「夕鶴」と枚挙に暇がない。

この二つの民族の伝承文学に登場する異界の住人の種類や個性も大変よく似ており、そのバリエーションの豊富さに於いても他の比ではない。乙姫が王女だったり、鬼が妖怪だったり、竹がワタクヌギだったりと細部に多少の違いはあるものの大筋は大変よく似ている。

人が異界に紛れ込んだり、異界の住人がヒョイと人界に現れたりしてはそこに居着いたり、或いは帰ったりする。これはこの世は目に見えない異界と直結しており、人間はそこに住む見える種族 (神々・英雄・妖精等)⁽⁹⁾ と自在に交流できるというケルトの古代からの考えに基づいている。また、これは輪廻転生に通ずる思想であり、人間や動植物には同じ命が宿り、共通した大霊が永劫に廻って生命を流転させるという考えにも結び付いている。

それにつけても、これらの憶念のいずれもが、なんと我々のそれらに似ていることだろうか。

第一次世界大戦勃発の頃、ロンドンに暮らした詩人野口米次郎はこう言った。
「古代の日本の詩人達の心に衝動的に湧き起こるイマジネーションは極めてケルト的である。
彼等は自然の中でたった一人になった時、心はケルト的な祈りの境地に入った。そんな瞬間
に彼等は人間の宿命を肌で感じていたのだ」と。

東では万葉の頃までのおおらかな大和の世界観と感情描出は、やがて古今和歌集の頃より
仏教の影響による万物流転観や無常観を湛えた隠遁主義的詩風に転じていった。これは西で
ケルト文学の自然の一部として生きる異教のおおらかさが、キリスト教移入以降、原罪意識
を帯びた陰鬱な描風に取って代わられていった時期とプロセスが似通っているように思える。

Int en bec, ro leic fet,
Do rind guib, glanbuide
Fo-ceind faid, os loch laig
Lon do chraib, chrannmnige.
— “book of kells” Anon —

えにしだ 金雀枝の 深き森のその陰で
黒歌鳥が さえず 囀り遊ぶ
真黄色き 嘴のその先で
生の歌レイグの湖に響かせる
—「ケルズの書」詠み人知らず（～6世紀）筆者訳—

ぬばたまの夜の更けゆけば

久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く

—「万葉集」山部赤人・（7～8世紀）—

Scel lemm duib, dordaid dam,
Snigid gaim, ro-faith sam,
Roruad rath, ro cleth cruth,
Ro gab gnath giugrann futh.
— “book of Lismore” Anon —

この身の周りなる 出来事は
鹿の声 積む雪 過ぎし夏
しゃかつしよく 赭褐色に揺れる 羊歯の原
今年も聞こゆ 野雁の鳴く声
—「リスモアの書」詠み人知らず（9世紀）筆者訳—

おく山に紅葉ふみわけなく鹿の

こゑきく時ぞ秋はかなしき

—「古今集」四・秋上・二五一 猿丸大夫（9～10世紀）—

ケルト生来の「漫住」を疎み「放浪・信仰」を厭わない気質は、キリスト教の思考が加わり
仏教でいうところの「出家」をし、修道士としての信仰を実践する一方で学問、文学を研く。

(5) 深層心理に伏流する精神の会流

仏教の仏や菩薩は^{やおよろず}八百万の神の中に吸合され、或いは神仏習合思想や本地垂迹^{すいじやく}思想により、土地の神々を曼陀羅に住まわせ融合し共存した。

一方キリスト教は唯一神であった為それ以外のものはすべて凌駕され「神」「人」「自然」（動物）は分たれ、人間の存在は自然の一部であるにも拘らず自然と切れる傾向を助長した。ヨーロッパのキリスト教以前の考え方では、古代の日本と同じく人間と動物は隔たりのない同等な関係にあり会話したり交流したりして自然の中で「神」「人間」「動物」は共存した。ケルトはそんな中で多くに宿生したり零落した神々や妖怪を登場させる伝承文学を生んだ。

極東のこの国では古くより「三種の神器」「三千世界」「三途の川」という様に「三」に特別な^{おも}念いを持つ。ドゥルイドも「三」を聖なる数とみた。ケルトの営んだハルシュタット文化の出土品には縄文土器の渦巻き紋様と見紛う^{みつどもえ}三巴の渦巻きがある。これは神社の「三巴紋所」とも酷似し、共に継続し流転する永遠の生命を表わすと考えられている。

古代、この「日出づる国」と「日沈む国」は共に太陽信仰を持っていた。ドゥルイド達は「日の出」「真昼」「日没」の三態に森羅万象の命の過程である「成長」「成熟」「崩壊」を当て、更に命の在る時を表わす「過去世」「現世」「来世」、そして命の住処の「天界」「人界」「冥界」を仮託に輪廻転生を説いた。ケルトは人界を一步出た世界は異界であり、そこに出入する為の特別な時間の裂け目が、年に何回か口を開くと信じた。その時間口からこの世ならぬ不思議な神秘の事象が立ち昇ってきている。そこにケルト幻想の湧出点を見る。ギリシャのレフカダ島出身の母とアイルランド人の軍医を父に持つ、ラフカディオ・ハーン (Patrick Lafcadio Hearn) は西洋に支配的だったキリスト教に対するヨーロッパ基層文化の一つである多神教的ギリシャ・ローマの宗教世界と、北方的ケルトの宗教世界を受け継いだ。そして世界を西に旅して四十歳の時に来日し、民俗学的関心をもって信仰と習俗に触れた末、遠東の国日本に故国のそれと酷似する伝承や異界、そしてそれらの湧出点を見たのである。

19世紀、そして20世紀に至っても、ユーラシア大陸の両端の島々を源泉とする文化の神道リバイバルとケルトリバイバルがほぼ同時期に勃興したのは大変興味深い。我が国では近代国家形成の過程の中で自らのアイデンティティーを古学復興によって模索した。ナポレオン (Napoleon Bonaparte) はフランスの民族的源流をケルトに見ようとし、「ケルトアカデミー」を設立した。これらはナショナリズムや支配的だった仏教、キリスト教への批判と結び付く。世界は今や、自然や異教を征し成就された欧米型合理主義、覇権主義や物への過ぎた信仰は行き詰まり閉塞感に喘いでいる。そして今更ながらケルト的な「原ヨーロッパの精神文化」への回帰や新しい価値観の模索に心を遣ろうとしている。

「欧米社会に於いては、ギリシャ・ローマを思考法の上で延長すればスペースシャトルに繋がるのに対して、日本文化の場合万葉集を延長してもトヨタやソニーには繋がらない」とアニミズム研究の上野景文氏は言う。だがしかし、双方の文化が共通して持っていたのは、「未だ知らない世界（異界）への憧憬」であり現代に生み出した宇宙船や自動車などの物は、そこへ旅する為の道具に他ならない。「欧米的」「日本的」という言い方は極めて表層的差異表現であり、人類の精神の深層部には多く共通の萌芽を持っているのではないか。異界のイメージはケルトや日本人のみならず、あらゆる民族が持ち合わせている。多くの伝承文学の主人公達が旅する異界は神世界でありある種の逃避の地でもあった。ユング (C. G. Jung) によれば、「神話とは『集合的無意識』すなわち、長い歴史の中で人間の心の中に形成され人々の心の深層に蓄積されていったものの投影である」と規定される。「畏怖への関心」がアニミズムを生み信仰の根源感情となる。やがて、自分達人間の存在が決して自然から切り離されたものでないこと、そしてすべては移ろい廻るものだということに気づく。この確かな感得と記憶だけは、その後勃興した宗教などによって容易に消し去れるものではない。

ケルトは森の民だと言われた。彼等は「森の記憶」を携え新たな森を求め西へと旅した。そして、時時の在り処で根付き多くの伝承の木々を植え、「記憶の森」を繁茂させていった。この旅は冒険と闘いの連続だった。ケルトにとって旅とは「人生」の異名でもあったのだ。

人が無性に旅に駆り立てられるのはなぜだろう。新しいものとの出会いや発見を渴望する人間の本性がそうさせるのか。それとも、それぞれの民族の培った美意識や価値観に適った住処や楽土を希求してのことか。いや、人はその行先に我々が再び帰し、在るべき究極的な在り処がありそうだと感じているのではないか。これこそが人類の絶対知（精神）なのではないか。そして「異界」こそが彼等の黙示する「在り処」ではなかったか。

古代のブルターニュのケルト達もおそらく自問したであろうことを近代のフランス人画家ゴーギャン (E. H. Paul Gauguin) は再び我々人類にこう問いかけている。

“D’ou venons-nous? Que sommes-nous? Ou allons-nous?”

「我々は何処から来るのか？ 我々は何者なのか？ 我々は一体何処へ行くのか？」

「旅」とは今いる「ここ」から「どこか」へ行って帰って来ることだとすると、「ここ」（この世）に来る前、我々は一体何処にいたのだろうか。否、「ここ」こそが「旅先」なのかも知れない。故に我々人間は単なる「ここ」（人界）の通行人 (passerby) であり、「あちら」（異界）との間を行き来する「旅人」であろうと、暗黙の内に了得しているのではないか。なぜなら、人はみな「ここ」にやって来たではないか。そして人はみな「ここ」を必ず去って行くではないか。

4. 演義小説による追懐 - 異界の物語に於けるケルトの追想 -

次にケルトの伝承文学の異界のファンタジーを燻蒸させた今作の体読を試みたい。そして、古のケルトの幽玄の異香を今に蘇らせ吸香し、しばし異界の幻夢に自らを臥遊させられたい。そうすることで必ずや、ケルトの魂の一塊を感得できるものと確信するからである。

(1) 資料 4.



皆既月食

THE LUNAR ECLIPSE

—ケルトの幻影—

—Tene and Pryderi—

(1) 旅ふたたび

その木はウェールズの丘陵地帯の外れにあった。

僕は汽車とバスを乗り継いで麓の町に着いた。安宿に一泊した後、水と食料を手に入れ僕はあの丘を目指し出発した。1989年 2月20日 5時24分。まだ冷たい風が吹き下ろす斜面を登り、見通しのきく場所に出た。空は晴れ渡り、尾根と谷の陰影を際立たせた。目の前に連なる茶褐色の山々は、どれもこれも似たり寄ったりに見えた。それは僕が今めざしているあの丘に比べたら、僕にとってはどうでもいい景色にすぎなかったからだ。二時間ほど歩いたろうか。ザックの重さが除々に肩にこたえてきた。僕はあと1000歩進んだら休もうと決めて歩数を数え始めた。山歩きでは普通、目標になる岩や木を目指して休みをとるのだが、少しへたってきた。「500歩にしておけばよかったかな」などと心の中で弱音を吐いていた。

やっとのことで1000歩を歩み終えると、崩れるように腰を下ろし水筒に手をやった。

山でこれ以上の飲み物があるか。人心地がつくと僕は足下の草を引き抜き口にくわえた。

すると、近くに何やら動くものがあった。目を凝らして見てみると、一羽のロビンが忙しく動いているのではないかと。餌でも探しているのだろう。その愛らしい仕草は、一時僕の疲れを癒してくれた。僕は再び歩き出した。なだらかな稜線を更に2時間くらい歩いたのだろうか。

僕は見覚えのある岩山に来た。次に小さな崖を登り山を下った。2月20日本日午前10時09分。

やっとな僕はこの丘にやってきた。そしてとうとうこのワタクヌギの木と再会したんだ。

長い旅だった。僕は木から40メートルくらい離れた例の岩の脇にテントを張った。

このテントをベースにしてあのコースを歩き回り、9日後の2月29日をここで迎える積りだ。

4年前のあの日と同じように——。

僕はこの4年間その日をずっと待ち続けた。

僕のこの4年間はその日を迎える為の歳月だった。

そして、4年前のあの日までの僕の人生はあの日を迎える為の歳月だったんだ。

(2) ケルトとの出会い

僕はこの地より北北東に160キロ離れたチェスター州の地方都市で生まれ育った。

町は大昔ローマ人によって作られたのが始まりだ。町外れにはローマ人やケルト人の残した遺跡や遺構が点在していた。僕は子供の頃から従兄弟と大昔のヤジリや土器、石器や鉄器などをみつけては、昔の人々の生活に思いをめぐらせたものだった。

僕が16才の時に近くの泥炭地でケルトの集落の跡がみつかった。そこからケルトの十字架や馬車のホイール、鉄器や幼児のサンダルが掘り出された。ピートの泥炭はタイムカプセルなのだ。その革製の小さなサンダルは驚く程よくできていた。幼いわが子に対する親の深い愛情がしみじみと伝わってきて、大いに感動させられたものだ。今それらはみんな町の博物館に展示されている。その頃から僕は昔の人々に関する本を貪るように読み始めた。

ケルトの人々の文化や生活を知れば知るほどのめり込んでいった。彼等の息遣いが伝わってくる物に出会うと、胸が震えたものだ。いつの日か僕は昔のケルトの人々にすっかり恋してしまっていた。とうとう大学では考古学や民俗学を研究するようになっていた。

勉強を続けた末、古ケルト語もほぼ使いこなせるまでになっていた。彼等の暮らしの匂いが微かにでもする所なら、何処へでも出かけた。普段の生活もケルトの暮らしを真似て家族や友人に笑われた。地元の郵便配達夫になった従兄弟は相変わらず僕のよき理解者で、休みを利用して一緒にケルトの謎解きを今でもやっている。僕には生まれた時から左手の平に、うっすらと丸形の痣^{あざ}があった。不思議なことに、僕が成長するに従ってその輪郭がはっきりしていき、丸みを帯びた十字の形になっていった。僕はそれがなんとなくケルトの十字架に似ているような気がした。いや、そう思いたかったのを覚えている。よく友人たちにそれを自慢気に見せては呆れられたものだ。4年前の今日 2月20日、僕は大学の卒業論文を仕上げる為の巡検でこの地を初めて訪れた。その年は今年と同じ閏年^{うるうどし}だった。巡検は十日間の予定だった。ウェールズのカンブリア山脈の裾野の丘陵地帯を、地図とコンパスを頼りに一人で歩き回った。ローマ人に蹂躪^{じゅうりん}され、アングロ人に裏切られたケルト達はこの山がちな最果ての地に追われるようにして移り住んだ。彼等はドゥルイドを中心に整然とした社会を築いていた。「風の民」と言われた彼等は森から森に移り住んだ。風は止まると消え入ってしまう。彼等は月で時を計り、生命の永遠と転生を信じた。今、他のヨーロッパの宗教や哲学そして物への信仰は行き詰まり、閉塞感に苦しみ喘いでいる。そんな中で、今さらながら原ヨーロッパの精神文化への回帰に関心を持つ者も少なくない。もちろん僕もその一人だ。

ケルトこそがヨーロッパの源流であり、我々の帰るべき故郷なのだ。

(3) テーヌとの出会い

4年前のあの時 2月28日まではかなりハードな行程の毎日だった。

その日は大雨になり、夜半から稲妻が光ってお腹に響く程の雷鳴が轟いた。僕は幼い頃から雷を異常なほどに怖がったそう。それは未だに変わらない。大嫌いだ。突然稲妻と同時にテントの脇に轟音と共に落雷があった。しかしテント脇の岩のお陰で危うく助かった。

その時慌ててコンパスを踏んで壊してしまった。その翌日からの山歩きが心配になったが、「明日また考えることにしよう。どうにかなるさ」と、わざと声に出し平静を保とうとした。そして多少震えながら寝袋に滑り込んだ。その夜はあまり眠れなかった。

翌29日はよく晴れていた。「いよいよ明日は大学に戻らなくちゃならない。今日でこの土地ともお別れかあ」そう考えるとこの土地の木の葉や土、そして風さえも袋に入れて持って帰りたくなったのを今でも覚えている。

その日は朝からケルトの気持ちになり切って野を歩いた。僕はあの時、予定にもない森や丘を記録もとらずにどんどん歩いた。「ケルトの人々や妖精もこの空を見てこの森を歩き、この丘を越えこの小川を渡ったんだろうな」「丁度このあたりで水を掬って飲んだ違いはない」その晩はケルト達も食べたであろうクヌギの実を焼いて食べた。

夕食後、クヌギの実をくり抜いて笛を作った。ほの明るい三日月を見上げながら笛を吹いた。かつてウェールズの集落である老婆から教えてもらったメロディーを笛の音にのせた。

笛を吹きだしてから20分ほどした時だった。薄暗がりの中に人影が見えたのだ。

「そんばかな」その人影はこっちに近づいて来るではないか。

「まさかこんな所に——」よく見ると見慣れないゆったりした白い服を着た娘が立っていた。彼女は目にいっぱい涙を溜めてこっちをじっと見ていた。「君は誰?」「テーヌよ」彼女は僕に駆け寄ると、「会いたかったわプラデリ。どこにいたの?ずっと探してたのよ」と言う。僕にしがみついていたのだ。「——ちょっと待ってくれ、人違いじゃないかい?僕の名前はジョンだ、僕は君を知らないよ——」そう言って彼女から離れると、彼女は深い憂いに満ちた表情で「あなたは雷に打たれて記憶を失くしてしまったのね、かわいそうに」と言うや否やその場に泣き崩れてしまった。

何がなんだか僕には解らなかった。僕はそっと彼女の肩に手を置いて抱き起こしてやった。そして少し恥かしかったが、僕の汗だらけのハンカチを貸してやった。ハンカチで涙を拭くと青い瞳が微笑んだ。「何てきれいな娘だろう」僕はうきうきとこの地に来た訳や十日間の山歩きのことや落雷のこと等を説明した。そしてコンパスを壊してしまい困っていることも。

すると彼女は「村へ帰りましょう。きっと父さんが助けてくれるわ」と言った。

僕は彼女に導かれるまま丘を下り歩いて行った。月明りの中で見える彼女の長い髪はキラキラと金色に輝いていた。「ほら、もうそこよ」、と振り向く彼女の美しい面立ちにハッとした。村は古くて小さい家が整然と並んでいた。松明の明かりに荷馬車が照らし出されていた。家々の裏には家畜も飼われているようだった。ゴルゼス・アルベルスという名前の村だった。「こんな所に村などなかった筈だが——」歩みを止めかけた僕の手を取って彼女は家の中に案内してくれた。家の中はもっと変わっていた。彼女の父母や兄弟と挨拶をかわした。みんないい人達で何かと気を遣ってくれた。僕はとても初めて会った人達とは思えないほどの親しみを感じた。食事と地酒をご馳走になりながら、僕は問われるままに大学や研究の事やこの地での山歩きの事、家族や友人の事などを話した。話がとても弾んだ。彼女の父親は歴史に、取分けローマの時代に興味があるようだった。「しかし待てよ、今の時代に囲炉裏で煮炊きしているぞ。家の作りもずいぶんと古めかしい。この村の人達の服装も何か変だぞ。第一この村は地図にも載ってないのはどうしてなんだ。変だよ、何もかもが——」。

でも不思議とそこは落ち着けた。「きっとこの村の人達は貧しいのだろう。あまりに小さすぎて地図にも載っていないに違いない——」僕はそう自分を納得させようとした。僕は父親にコンパスが壊れてしまった事を話したが、彼は怪訝な顔をして「コンパス？何だいそれは？」僕は次の言葉につまってしまっていた。すると母親がやって来て「父さん、お客さんは疲れておいでなんだから余り聞いちゃかわいそうですよ」と言いながら木の盆にお代わりの豆を盛ってくれた。僕自身も“コンパス”という言葉に強い違和感を感じていた。「あれ！？、さっきから彼等が話している言葉は古ケルト語じゃないか。そう言えば僕だって古ケルト語でしゃべってた。無意識に話していたが、古ケルト語に“コンパス”なんて言葉などあるわけがない。だから変な感じがしたんだ——」僕は突然我に返った。「なぜ大昔の言葉で話すんだ——。なぜ電気もガスも無いんだ。水道も。その皮のサンダルは博物館にあるやつと同じじゃないか。何もかもが今僕の研究してる時代の物ばかりじゃないか。この人達は一体——」でも、次々に浮かぶ疑念をすぐに彼等につけることはしなかった。

僕も観察・仮説・検証を専らとする学問研究者の端くれ。まずは冷静になろうと努めた。彼女の家族の気分も悪くしなくなかったし、後でテーヌに聞けば色々と解るだろうと思った。食事の礼を言った後僕はテーヌを庭の散歩に連れ出した。テーヌは歩きながらアザミの花を一輪摘み、アーサー王にまつわるその花の伝説を話してくれた。その話は僕の大学の恩師の一人がその頃まさに研究テーマにしてたケルト民話だったのだ。先生もまだ解き切れてない部分まではっきりと語られていた。何とも妙な気持ちだった。

僕はテーヌの優しさや利発さ、可憐さに心を奪われていった。いや、それ以前に何とも表現しがたい懐かしさと安堵^{あんど}の気持ちがあった。僕達は長い時間、時の経つのも忘れて話した。その時、僕は自分がプラデリじゃなくてジョンだということを再び話した。

でも彼女は聞こうとはしなかった。

そして僕はさっきから疑問に思っていたことのいくつかを尋ねてみた。するとテーヌは急に涙声で「私には解らないわ。やっとうこうして会えたのにどうしてそんなことばかり聞くの?」と言うだけだった。僕は彼女に何か悪いことをしたような気持ちになった。そして彼女がとても愛しくなり思わず唇を奪った。長い長い口づけの後、二人は押し黙った。

もう僕はさっきの疑問のことなど半ばどうでもよくなっていた。後でじっくり調べれば解ることだとも思ったのだ。「テーヌ、夜もだいぶ更けてきた。僕はそろそろテントに帰るよ」と僕が言うと彼女は「どうして行くの?もうどこへも行かないで。また敵の兵士達が来るわ。雷が怖いの」と言って泣きじゃくった。僕は彼女に、「テーヌ、いったい何のことだい?僕にはわからない——」と言うと彼女は「全部ローマ兵と雷のせいよ。あなたは忘れたの?もう私を一人にしないで、お願い——」と言って僕の胸に顔を埋めた。僕は彼女の両肩に手をやって、「どうしても明日大学に戻らなくちゃならないんだ。解ってくれ。僕だっぴつとここに居たいんだよ。また来月必ず来るよ。テーヌ、君を愛してる。待っていてくれるね」そう言うと、彼女は目を閉じて力なくうなづいた。

すると彼女の父親がおずおずと庭に出てきて、彼女に家の中に入るよう促した。彼女は泣きながら父の言葉に従った。

庭に立ちつくす僕に向かって父親は「君を今夜家に泊めてやりたいが、それは出来んのじゃ。悪く思わんでくれよ」と言って、壺に入った濁り酒と手のひらに一握みの木の実をくれた。「テントで食べなさい」と言うと父親は僕の手ひらの十字の形の痣をじっと見つめながら、「アヌン アラウン バルド」と言った。そして、僕の体を強く抱き締めたのだ。確かそれは古いケルト語で「ああ神様!」とか「おお転生!」とかいう意味だったと思う。

それから父親は僕に必ずまた娘に会いに来てやって欲しい、そして三日月の明りが陰らないうちに早く村を出て行くべきだと言うのだ。何が何だか解らないまま、僕は三日月の薄明りの中をテントに向かって歩きだした。

テントに着いてすぐに寝る支度をする、寝袋に滑り込んだ。

しかし、あの村のこと、そしてテーヌのことなどを考えながらなかなか眠れないでいた丁度その時だった。テントの外に人の気配がした。そこで僕は両肘で這うように外を覗いてみた。すると、40メートル程先のワタクヌギの前に白い服の人影が立っていた。

「きっとテーヌだ」僕が彼女の名前を呼ぶと、彼女もそれに応えてこっちに走ってきた。僕は急いで寝袋から出ようとして何度か転んだ。テントのすぐ近くまで来るとそれがテーヌだということがはっきり分かった。僕は「テーヌ、こんな時間に来て大丈夫かい」と尋ねた。すると突然に月明りが陰りだし、辺りが暗くなってきた。彼女は立ち止まり月を見上げると、僕の方を向いて絞り出すような声で「いつまでも待ってるわ」と言うと、来た方向に走って行った。すぐに僕は彼女の後を追ったがそこには誰もいなかった。ただ、ワタクヌギの木が一本立っているだけだったのだ。それ以来テーヌには会っていない。

(4) 村の言い伝え

翌朝、僕はテントをたたんで麓を目指し早足で山を下りた。

小雨で足場の悪くなった山道を休まずに一気に下っていった。一刻も早く大学に戻り用を済ませて再びこの丘に来たかったのだ。あの村に、そしてテーヌに会うために――。

何時間歩いたのだろうか。やっとのことで僕は麓の町に着いた。町に着くと僕は真っ先に目に入った近くの鍛冶屋に飛び込んだ。喉がからからに乾いていた。「すみません、水を飲ませて下さい」と僕が頼むと、無愛想な鍛冶屋の亭主らしい男は鋤を持ちながら、「その水を勝手に飲め」とばかりに顎で井戸のありかを示した。僕は背中にザックを背負ったまま水を飲みながら、山歩きのことを話した。だが、亭主は僕の話に何の関心も示さなかった。次に僕はあの村のことを亭主に聞いてみた。すると、亭主はそれまでろくに注意も払っていなかった僕に視線を向け、怪訝な顔つきをした。そしてまた黙って鋤を振るうのだった。どうしてその村が地図に載っていないのかを尋ねたが、無駄だった。僕はタオルを濡らして顔や手を拭きながら古めかしい村のこと、囲炉裏や食事のこと、村人のこと、そしてテーヌのことを話した。初めは何も語りたがらなかった亭主が突然に鋤を置いて口を開いたのだ。「お前さん、見たのかその村を?」「ええ見ました」と答えると、亭主はまた黙りこんだ。僕がその失敬な亭主にやや懨然として、自分は村を見たというより数時間そこに居たんだと述べて、そこを後にしようとした時だった。亭主は左手で髭面を擦りながら再び話した。「皆殺しにされたのさ、そのケルトの村は。ローマの兵士達にな――」

「えっ、ローマの兵士達? それはどういう意味ですか?」と僕が聞くと、

「奴等は村を焼き払って女や子供も容赦なく、人っ子一人残さず殺っちまったってこったあ」

「何だって? 何言ってるんだこのおやじは。ローマ人がケルト人を殺戮したのは2000年も前のことだろう」僕は内心で憤った。思ってもみなかったその返事に呆氣にとられてもいた。

そして僕はとうとう「そんな筈ないでしょう。確かに村はあったし人も住んでいたんですよ。この目で見たんです。彼等と話もしたし食事だって御馳走になったんですよ。濁酒や木の実ももらったんですよ、ほら」と、僕は食べ残しの木の実をポケットから取り出して見せた。

亭主は木の実に目もくれずに「クヌギの実だろ。それがいわく因縁の木の実だ」と言った。僕は「あなたの言っていることは何が何だか解らない。彼等が亡霊だとでも言うんですか？ 今度あの村に行って証拠の写真でも撮ってきますよ」、と言ってその場を去ろうとすると、亭主は声を荒げて「よせ、もう行かない方が身のためだぞ」、と言う。僕が振り向きざまに「どうしてですか？」と返すと亭主は「まあ聞け」と続けた。「その村には哀れな言い伝えがあつてな、ローマ人と戦ったケルトの英雄カラタクスが捕まって処刑された後、奴に手を貸したその村は焼き払われたんだ。ローマの將軍の命令で見せしめのために村人も皆殺した。閏年の 2月29日のことだそうさ。村にはプラデリという若者とテーヌという美しい娘がいた。二人はたいそう好き合っていたそうさ。二人はよく働く親孝行者で、将来は夫婦になることを約束し合ってる間柄だった。村人の誰もがこの二人のことを祝福していたそうさ。二人はよく山や川で遊んだり、若者が吹く木の実の笛に合わせて娘が踊った。村に火が放たれた時二人は丘にいたが、若者は間もなくローマ兵に見つかり手のひらにケルトの十字の焼き印を押された。その後剣で殺されて丘に埋められたそうさ。風の強い日にゃ今でも時々その笛の音が聞こえるって話だあ。あの辺りにゃあ「笛吹き丘」という地名がまだ残っとる。

娘はすぐ近くのワタクヌギの木の幹の大きな^{ほら}洞の中に隠れていて助かった。娘は何日も何日も震えながらじっとしていた。ローマ兵が村を去った後いざ洞を出ようとするとうとう出られない。数か月して娘はとうとうワタクヌギの中に取り込まれてしまったんだと。

そのうち木の洞はすっかり塞がったそうさ。すると、近くの丘に埋められた若者のポケットの中のワタクヌギの実が芽を出して、見る見る間に大きくなって娘を取り込んだワタクヌギと同じ位の大きさになった。やがてその木は雄株になって娘の雌株と^{ひとつがい}一番になったそうさ。その後、閏年の 2月29日の三日月の夜になると雄株と雌株の中から二人が抜け出して、一晩中夜明けまで楽しく遊んだそうさ。一晩だけだぞ。それも晴れて月明りがある時しか出てこれねんだ。今から百年前の夏、この地方に大雨が降ったそうさ。雷が鳴って何日も何日も大雨が降り続いた。ある晩雄株に雷が落ちてすっかり雄株は焼けちまった。それから閏年の 2月29日にたまたま空が晴れて三日月が出ても、若者は一向に出てこなかった。それからというもの、その晩になると一晩中娘が若者の名前を呼びながらその丘の辺りをさ迷うんだ。村もその一晩だけ蘇って夜明けにゃまた消えちまうんだ。たまたま人がその晩その村に迷い込んで月の明るい内に戻って来ねえと、命を落とすか永久に村を出られねえかのどっちかだ」

亭主がここまで話し終えた時、奥から彼の女房らしい初老の女性が出てきた。そしてこう言ったのだ。「あたしの爺さんが若い頃にこの辺りに住んでた仲間が、村が蘇って日にその辺りに行ったきり帰ってこなかったって言ってたよ。ここから少し行った隣の村じゃ四年前、若い衆が遊び半分でその日そこへ行って帰るにゃあ帰ったものの、みんな気が変になって二人が死んだって話だよ。あんたも二度とそこにゃ行かない方が利口だよ——」僕はしばらく口がきけなかった。亭主は再び鎚を振るい始めた。「そんな馬鹿な話を誰が信じるものか」僕は一旦はそう思った。しかしどうしてテーヌやプラデリの名前を知っているんだろう。そしてワタクヌギのこと、三日月や落雷のこと、ローマ兵の、そしてケルトの十字のことを。その時僕は落雷に遭ったような衝撃を全身に覚えた。テーヌの「ずっと探していたのよ」「やっとうこうして会えたのに」「敵の兵士たちが来るわ。雷が怖い」「いつまでも待ってるわ」という言葉を思い出した時、そして焼き印とこの痣のことが結びついた時、僕はすべてを信じない訳にはいかなかった。すべてを理解した。そして僕こそプラデリの生まれ変わりだということを悟った。僕は大学へは戻らず、その足ですぐにあの村があったあの場所を目指して再び山を登った。一度も休まず僕は歩き続けてそこにたどり着いた。だが村はなかった。次に僕はテーヌに初めて会った丘へも行ってみた。そこには見渡す限り一面に草原が広がり、草がそよぎ小鳥がさえずって、風がヒューヒューと吹いているだけだった。まるですべてを忘れてしまえとでも言うように。僕がそこで見た村、すべての物や人は完全に消えていた。僕はワタクヌギの木に腕をまわし、そっと口づけた。木の根元にひざまずき、僕は声をあげて泣いたんだ。その後僕はそこで三日間過ごした。それから山を下り大学に戻って、次の三日月の日に再度ここにやって来た。だが、テーヌにも村にも会えなかった。

(5) テーヌとの再会

あれからもう4年が経とうとしている。僕は再びめぐってきた閏年の今日 2月20日、こうしてまたこの丘にやって来た。その日 2月29日は三日月になるということだ。だからなんとしても晴れてくれなくては——。あと9日間待てば彼女に会える。僕は4年前と全く同じプランで山を歩いて、その日を迎え

るつもりだ。「どんなに僕がその日を待っているか分かるかいテヌ？　美しい髪、青い瞳、優しい声のテヌ。愛するテヌ。あと少しで会えるよ。僕は今度君に会えたら二度と君を離さない。そしてあの村を離れたりしない。君と、そして彼等と永久にここで暮らすんだ。その為だったら、僕は妖精だろうと小人だろうと、或いは妖怪だろうと、何にでもなろう」約4年ぶりに訪れた夢にまで見たこの丘が、以前と何も変わっていないことに安堵した。そしてあのワタクヌギの木を抱擁してあの日と同じように口づけた。しばらくの間山を歩き回ってテントに戻って来たのは18時30分頃だった。今日 2月20日の夜に、この地方で数十年ぶりの皆既月食が見られることを僕は大学の友人から聞いて知っていた。でも正直いって 2月29日さえ三日月で晴れてくれるならば、あとはどんな月だろうとあまり関心はなかった。僕は夕食を済ませて他に何もすることもなかった。そこで、僕はテントの近くに横になって頬杖をつきながら皆既月食を見物することにした。夜空には大きな満月が明るく白光を放っていた。「もうそろそろの筈だが――。何時から始まるって言ってたかなあ」僕は多少いらいらしながら天空のショーの開始を待っていた。それでも始まらなかったのも、僕は退屈を紛らすためにポケットに忍ばせておいた木の実の笛を取り出して吹き始めた。19時11分、月が右端から除々に欠け始めた。僕は笛を吹くのを止めて月に見入った。とても幻想的な光景だった。月が何かに食べられていく様だった。“月食”とはよく言ったものだ。その後月食は数十分間続いた。僕は少し飽きて来て、あの笛を口に当ててまた吹きだした。いつの間にか僕は無意識にあのウェールズの老婆から教わったメロディーを吹いていたのだ。そのメロディーに出会った瞬間から僕は無性にその曲が好きだ。僕はピアノでクルミ割人形は弾けないがクルミは割れるしこの笛だって吹ける。哀調に満ちたその旋律は哀愁を帯びた笛の音によって命を与えられた。月がちょうど三日月になってしばらくした時だった。テントから少し離れた所から、風に乗って女性の声が聞こえてきた。僕はすぐにテントから出て声の主を探した。月明りで周囲が見えた。しかし、人らしい影は全く見当たらなかった。「風の音だったのかな――」僕があきらめてテントに戻りかけた丁度その時だった。「プラデリ～」と言う声がか確かに聞こえた。声の方角を目を凝らして見てみると少し離れたワタクヌギの木の前に白い服の人影が見えた。「テヌだ！」「テヌ、僕だよプラデリだ」そう僕が叫ぶと、「プラデリ！」「来てくれたのね、うれしいわ」と彼女が応えた。僕が彼女に向かって走り出すと、彼女もこちらに懸命に駆けて来る。夢にまで見たテヌが、すぐそこにいる。やっこの4年間で報われる。あと少しで彼女をこの手に抱き締められる。このわずかな時間が永遠に感じられる。次の瞬間、僕はハッとした。「違う！あの三日月は月食による一時的なものだ。今日はまずい。今日じゃない！」僕は立ち止まり月を見上げた。

月は月食によってほとんど消えかかっていた。あたりはどんどん暗くなっていった。すると、テーヌが「キャー！」という叫び声をあげたかと思うと、急に背を向けてワタクヌギの木に向かって走り出した。月が完全に消えた真の闇の中を僕は彼女を追って走った。

「テーヌ、テーヌ！」ワタクヌギの前に立つと闇の中でうっすらとテーヌの姿が見えた。

僕は思わず彼女を抱き締めた。腕に柔らかい^{おうち}凹凸が感じられた。「テーヌ、会いたかったよ。何とか言ってくれ！」するとどうしたことだろう。彼女は身をよじって「ウッー」と呻いた。月食が終わって月が膨らみ始め、あたりがどんどん明るくなってきた。

僕がそこに見たものは、なんと半分木になりかけたテーヌの姿だった。

㊦㊦

EPILOGUE [エピローグ]

それから主人公はしばらく彼女の、いやワタクヌギの前にへたり込み茫然としていた。その時、一瞬彼女が弱々しく彼の名を呼んだ。再び立ち上がった彼は、よろよろとテントに戻った。そして荷造りを済ませテントをたたみワタクヌギの、いや彼女の所へそれを運んだ。そして、そのテントで彼女をすっぽりくるんでやった。そうして彼は改めて9日後の三日月の夜を待ったのだ。彼はテントの上から彼女をいつまでも抱き締めていた。空にはケルト十字の環の様な満月が二人を照らした。その後テーヌとプラデリがどうなったか知る者はない。ただ、ジョンは二度と再び戻ることはなかった。その丘には今も一本のワタクヌギが立っている。そして、今だに笛を吹くような風が吹いている。



DEDICATION

Here be a flower, Here be a man in this world
A flower gives solace to a man, a man sheds petals
A blast of wind and shaft of light from the beyond
A Gale never obstructs light and light never a gale
They just grow everlasting still forests, and woods
The memories of woods turn into luxuriance of legends

人界に咲く一輪の花 人界に過す一期の命
花は人を慰さめ癒し 人は花を散らせ折る
異界より吹く一陣の風 異界より差す一筋の光
風は光を妨げることはなく 光が風を妨げることもない
ただ 深く静寂な森々をそこに育むのみ
そして森の記憶はやがて 記憶の森々となって繁茂する

—筆者作—

「皆既月食」追補

- 皆既月食——月食において月全体が地球の本影に入り月面に太陽光が全く当たらない状態。月の輝きが完全に消えた瞬間（食既）から、再び輝き始める瞬間（生光）までの状態が数十分続く。ケルト人や他の諸民族は食既の瞬間から生光までの暗黒の時間は魔界の邪鬼や妖怪、怨霊の類が人界に現れ活発に活動して災禍や不幸を運ぶ忌わしい魔の時間帯とした。
- ウェールズ (Wales)——原義は「よそ者」・イギリスのブリテン島西部の山岳地帯の多い地域。アングロ人やサクソン人に追われたケルト人の末裔達が住む。1284年にイングランドに併合された・首都は (Cardiff) 首都別称 (Cambria)
- ロビン (robin)——イギリスの国鳥・スズメ目ヒタキ科の小鳥で、雄鳥は胸部が鮮やかな赤色で愛を告げる鳥として親しまれる。日本のコマ鳥と同種で赤栗色。
- ワタクヌギ——山地に生える雌雄異株の高木落葉樹・大木は高さ17m直径60cmになる。(quercus variabilis) 堅い実がなり樹皮は厚くコルク層が発達していて凹凸がある。
- 泥炭 (peat)——湿原植物などが枯死して堆積し、部分的に分解、炭化作用が進行した土塊状のもの。スコットランドなどではウイスキー造りの燃料に使用。
- ローマの支配——前55年シーザーは神秘の地であり伝説的な鉱物資源に富むブリタニア (Roman's rule) [現イギリスのブリテン島] に渡った。その後反抗するケルトの諸部族を撃破しローマ化を進行させた。しかしその征服は不完全で、北部ハイランドやウェールズの征服は未遂に終わり、後410年ホノリウス帝はブリタニア人に自主防衛を通告し支配を終え、ローマに撤退した。
- ケルトの十字架——ケルトの芸術がキリスト教化された結果生まれたケルテック ハイクロス (Celtic Cross) ロスという巾の広い独特な十字と、輪 (円環) を上部に合わせ持った合成様式の石製の十字架。大地から生えたような石への信仰があった。
- テーヌ (Tene)——スイスのティエル川の岸にあったヨーロッパの鉄器文明の第二段階の標準遺跡ラ・テーヌ (仏語地名) 文化の名からとったヒロインの名前。
- ゴルゼスアルベルス——ウェールズの古代ケルト人の神話に出てくる場所の名前。その意味は (Gorsedd Arberth) ケルト語群の一派ウェールズ語 (Welsh) で「宮廷の魔法の会合の場」。
- プラデリ (Pryderi)——ウェールズの古神話「マビノギオン」に登場するスリス・アルベルヌの領主プウイルとその妻フリアノンの息子の名からとったヒーロー名。
- カラタクス (Caratacs)——紀元43年から75年頃までローマと戦ったケルトのリーダー。晩年にはウェールズの山岳地帯で諸部族をまとめ果敢に挑むが破れ処刑された。

(2) [皆既月食] 反顧と反芻

ケルトの伝承文学の中で靈魂不滅や輪廻転生のテーマの延長線上に再生（復活）、或いは亡霊との遭遇や交流が描かれることがある。

再生する (rise or revive) とは死にかかった者や、一旦は死線を越えたがまだほど無い者が生き返る（蘇生する）ことを、そして亡霊 (ghost or spirit or visitant) は本然的に本籍地が死線の向こう側の住人がこの世（人界）に姿を現したものである。再生は主に肉体的な復活を、そして亡霊は心の働きを司る魂の、つまり精神的な復活を専ら領解するものである。我が国の俗信に於いては、亡霊は成仏し得ずに此岸（この世）から彼岸（あの世）に渡れない亡者の成れの果てである。一方ケルトに於いては、亡霊は自らの意思で人界にとどまって、異界行きを拒絶したり猶予したりもするのだ。しかし、双方の亡霊達が「ここ」に滞留するのには、ある共通の理由があることが多くの伝承から読んで取れる。

それはこの世の人、或いはものに対する極めて強い「執着」である。

本演義小説は、ローマによるブリテン島の占領とウェールズで起きたカラタックスのローマへの抗戦という史実を背景に描かれている。ケルトの伝承に頻出する「妖精・ドゥルイド・亡霊」そして「ケルトの十字架・森・風・月」などを話材に織り込み、古のケルトを愛する若者と美しき死霊や失われたもの達との邂逅を物語る。若者はある日雷鳴をきっかけに異界へと足を踏入れてしまう。一度はそこを出るが、皆既月食の最中異界へと通じる風穴が一瞬口を開き再び閉じる。若者は果たして異界へ迷い込んだのか、それとも異界の人々が人界に迷い出たのか。いや、そのどちらか一方ではないのかも知れない。ケルトの伝承文学の世界では異界から、そして異界へと、双方から異風が吹いていることが多いからだ。ワタクヌギは雌雄異株の落葉樹で、雌株と雄株の1対が揃わなくてはならない。離れて単独には命を繋げないのだ。テーヌは若者を片割れのプラデリ、或いはプラデリの生まれ変わり（転生者）と見定め、若者はケルトをそしてテーヌを心から愛した。彼等二人のこの極めて強い「執着」こそがその「風」を起させ、ついには再会を果たしたと考えたい。シーザーは「ガリア戦記」(6-18)で「彼等の一年は太陰月からなり、そのためガリア人は昼ではなく、夜で時を数える」と記した。太陽には「生・活力・再生・陽気」等の陽性の心証があるのに対し、月は「死・衰微・滅び・陰（狂）気」等の陰性の心証が付いて回る。だがケルトは死をも恐れぬ勇敢な民族だった。そして“moon”に「流離う」という意味があるが正に「旅する族」でもあった。古のケルトへの憧れを抱く研究者の若者は現代のヨーロッパを、そして月で時を計って蘇るテーヌや他の亡霊達は滅びを宿運とされながらなおも甦らんとする族、ケルトを象徴させた。

おわりに

ユングの言葉にこんな言葉があった。

“Human nature is against Nature”

「人間の性質は、自然界の本性に対立するものである」

—筆者訳—

古代ギリシャのヘレニズム (Hellenism)、ユダヤのヘブライズム (Hebraism) そしてローマへと連なるヨーロッパはキリスト教と合理主義という宗教に帰依し「神」と「人間」と「自然」を明別し、元来自然の一部として存在するはずの「人間」をそこから摘み取り遊離させた。人間はやがて遠慮会釈なく自然に鞭を打ち、人間の足下に平伏^{ひれふ}させようとした。

その挙げ句に、今度はその自然が人間に対して報復の狼煙を上げようとしているのだ。

こんなヨーロッパの文化は、「この世界は一人の神と一つの超越的な不変の法則により支配されている」という妄信と信仰とを基底に持っている。

それに対しケルトの文化は、「この世界は多くの神と多くの超常的な変化の法則により差配されている」という敬信と信仰とを基底に持っている。

冒頭のユングの言葉は、本来の出自たる自然に主根を失った人間が誤って獲得した特性 (質) に対する自嘲であり皮肉であり、或いは警句でもあるのだ。

現象主義哲学は西欧文化を専ら規範とするそれまでの傾向性を批判し文化的多様性を認め、「それぞれの文化にはそれぞれの構造があり、どちらが良いものと言うことはできない」との立場をとっている。だがキリスト教は自然と折り合って生きるケルトの文化を異端とした。そして今更ながら、森に住処を求め多くの伝承を遺して理想性としての「異界のヴィジョン」と生命の実相としての「輪廻転生」を心受するケルト的な「原ヨーロッパの精神文化」への回帰を志向する動きが高まっている。

本稿では伝承文学中にケルト民族が古来創出し彫塑してきた理想世界や異界のヴィジョン、そしてそれらの異性、神秘性について考察した。更にそれらを生んだ精神の淵源をも探った。その結果、それらすべての湧出源 (始原) として以下五つの創成ファクターに行き当たった。

- ①人間の目に見えない、或いはとても手に負えない力や存在に対する強度な畏怖と肯定の念。
- ②あらゆる事物は具体的な形象を持つと同時に、固有の靈魂を持つ存在と考えるアニミズム。
- ③常に未知で新規 (奇) なものや世界を希求する、人間の本性的な好奇心やイマジネーション。
- ④力が支配し苦難の多い人界にない超能力を備え、自在に生きられる別世界への憧憬と逃避。
- ⑤森羅万象 (万物) は流転し変転し、我々の生命ですら永劫に輪廻し転生するという確信と信仰。

このいずれもが我々すべての人類の “Nature” (本性) に於いて未だ普遍性を失ってははいない。

注

- 1) スペインのガリシア地方 (Galicia) をこれに加える動きがある。－2007年現在－
 - 2) 頭部が鴉のエジプトの学問・知識・記録の神であり、月神として時の計算も司るトート (Thoth) をギリシャの神ヘルメス (Hermes) と同一視して呼んだヘルメス トリスメギトス が作ったとされるオカルトの銘板。「一つの霊妙なるものの完成に当っては、下なるものは上なるものの如し、上なるものは下なるものの如し」と記されている。大宇宙と小宇宙との相互関係を示したこの思想は、中世ヨーロッパの錬金術に大きな影響を与えた。
 - 3) ケルト民族やラテン系民族の伝承に見られる自然物の精霊 (仙女)。姿は一般的に人間と同じか又は人間に似た容姿をしており、男も女もいるが主には女であることが多く人間より小さく緑色又は灰色の服を着ており、森や丘、山腹を住处とする。変身・消身・呪い・瞬間移動など数々の超自然的な能力を持つ。薄い羽で蝶のように飛び回る美少女というイメージはシェイクスピアの作品辺りが発想源であろうが、元来は醜く奇怪であることが多い。ただ単にフェアリー (fairy) と呼ばれるだけでなく、地方や性格に応じて呼び名は異なる。イングランドではエルフ (elf)、ホブゴブリン (hobgoblin)、スコットランドではブラウニー (brownie)、アイルランドでレプレコーン (leprechaun)、コーンウォールではピクシー (pixy) などと呼ばれ、人間の対し方によって善も悪も行う。その数は凡そ200種。
 - 4) 中仏、北仏に住むケルトの族長をまとめて反乱軍を組織してローマのシーザー軍に甚大な被害を与えたガリアの一リーダー。52B. C. のアレシア (現在の中仏アリーズ=サントニ レヌ) の戦いで8万人の精鋭と共に8か月間抗戦するが大敗を喫した。この敗北は大陸ケルトへの弔鐘となり、その後のローマのブリテン島への本格的な支配の号砲となった。
 - 5) ゲルマン民族 (German) の一派で “Jutes, Saxons, Angles” の3部族を主に指す。55B. C. の偵察侵入に始まり、410A. D. のローマ軍撤退後にユトランド半島及び北ドイツから来島し、先住のブリトン人を駆逐して島内広範に王国を築いた。[なお、伝承にあつては素朴でユーモラスなものを多く遺した]
 - 6) ローマ神話はギリシャ神話を踏襲したものである為、このように纏めて呼ぶのが通例。
 - 7) シーザーは「ガリア戦記」の中で確かに「ガリアは夜で時を数える」と言ったが、純粋な太陰暦ではなく閏月を設け太陰暦を太陽の運行と合致させようとした太陰太陽暦だった。
 - 8) 紀元3世紀、スコットランドの高地地方のケルトの一派のゲール人 (Gaels) の間で語り継がれた古歌集。北部モールヴェン地方 (Mor-bheann) の王フィン (Fhinn) や王子オシアン (Oisein) や戦士達の活躍を通し、民族の心を謳う。18世紀にジェイムズマクファーソン (James Macpherson) が翻訳・改作をした。[なお、英語では “Ossian” と綴る。欧州ロマン主義運動に圧倒的な影響を与えた]
 - 9) 日本の伝承文学に於けるそれは、自然神・大御神・御先祖様・鬼神などがこれに当たる。
- *本稿4の演義小説「皆既月食」は著者による戯作でありケルトへの奉獻の意をも兼該する。

参考文献

- Layard, John. "A CELTIC QUEST", : Spring publications, Inc.; Dallas Texas, 1975
- Hall, James and Steinman Martin. eds., "The permanence of Yeats", : New York; Macmillan, 1950
- Kermode, Frank. "Romantic Image", : Routledge & Keigan Paul Co., 1957
- Evans, E. Estyn. "Irish Heritage", : Dundalk, Dundalgan Press, 1942
- Haywood, John. "The historical atlas of the celtic world", : Thames and Hudson Ltd., London, 2001
- Yeats, W.B. "A General Introduction of my work", - In Essays and Introductions - : London; Macmillan, 1961
- Yeats, W.B. "A Vision", : G.M. Harper and W.K. Hood Lodon Macmillan, 1978
- Cunliff, Barry. "The celtic world", : EMB-Service for Publishers, Lucerne, Switzerland, 2000
- Bloom, Harold. "Yeats", : New York; Oxford University Press, 1970
- Eluere, Christiane. "L' Europe des Celtes", : Motovun Co. Ltd., 1992
- Black, Jeremy. "The Historical Atlas of Britain", : Sutton Publishing Ltd., 2000
- 田辺保著「ケルトの森・プロセリアンド」-La foret de Broceliande-, (青土社) 1998
- 東浦義雄・竹村恵都子著「イギリス伝承文学の世界」-Myths and Folkstories from Britain and Ireland-, (大修館書店) 1993
- 松村賢一著「ケルトの古歌『ブランの航海』序説」-異界と海界の彼方- (中央大学出版部) 1997
- 井淵博著「イエイツとの対話」(株式会社みすず書房) 2007
- 鎌田東二・鶴岡真弓編著「ケルトと日本」(角川選書 319) 2000
- 中野節子著「マビノギオン」-中世ウェールズ幻想物語集- (J U L A 出版局) 2000
- 河合隼雄著「ケルト巡り」(日本放送出版協会) 2004
- McDowall, D. "An Illustrated History of Britain", : Longman Group UK, 1989
- 大澤謙一訳「図説イギリスの歴史」(東海大学出版会) 1993
- 中央大学人文科学研究所編「ケルト・生と死の変容」(中央大学出版部) 1996
- 鶴岡真弓著・月刊みんぱく編集部編「世界の民族」(河出書房新社) 1997
- 田中仁彦著「ケルト神話と中世騎士物語」-他界への旅と冒険- (中公親書) 1995
- 田文揚著「ザ・トワイライト ゾーン」-異空間への旅- (鳥影社) 2002
- 田文揚著「ザ・マジカル リリカル リリックス」-泡沫の一零- (フォーコー) 1998